

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2014

2

ISSN 1340-8917



特集 ■ フットパスによる地域活性化

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／「地域づくり」は「つながりづくり」

久元喜造(神戸市長)

特集

フットパスによる地域活性化

4 基調論文 まちづくりの手法として活用を

谷口尚弘(北海道工業大学准教授)

8 北海道上富良野町 北海道の雄大な自然を感じ、「道を楽しむ」

佐川泰正

10 北海道黒松内町 滞在型観光に向け、豊かな自然生かす

桜井淳一

12 秋田県由利本荘市 国民文化祭を契機に「由利本荘版フットパス」

大山 慎

14 山形県長井市 清流・最上川を利用し、水辺の散策ルート

浅野敏明

16 茨城県行方市 フットパスを整備し、観光誘客めざす

宮川貴弘

18 千葉県印西市 都市住民を呼び込み、農村地域を活性化

丹澤正直

20 東京都町田市 フットパスで町田の魅力を再発見

牛腸哲史

22 山梨県甲州市 「ぶどうとワイン」のまちを活性化

小澤正光

24 長野県飯山市 ロングトレイルが新たな観光資源に

木村 宏

26 兵庫県稲美町 「ため池」を活用し、散策ルートを設定

本岡利章

28 鳥取県鳥取市 フットパスを地域おこしのツールに

平尾 和彦

30 熊本県美里町 地域を元気にする「魔法」・美里フットパス

井澤るり子

32 副基調論文 日本におけるフットパスのとりくみ

神谷由紀子(日本フットパス協会理事)

35 種差海岸の持つ「魔力」に包まれて

町田直子

レギュラーレポート

36 地域トピックス 福井県鯖江市
オープングバメントを推進

牧田泰一

38 アンテナショップ調査
都道府県のアンテナショップ、過去最高の38店に

39 アンテナショップ情報 北海道美瑛町
東京・有楽町に町単独で出店

40 移住・交流推進支援事業 千葉県木更津市
移住者のネットワーク化を推進

伊藤浩之

42 地域づくり団体探訪 栃木県鹿沼市
かめま暮らしネットワーク
都市住民向け「菜園付き宅地」販売に奮闘

44 書籍紹介

45 首長の思い
人口が増え続けるまち御殿場を目指して 若林洋平(御殿場市長)

48 センター通信

グラビア

2 フットパスによる地域活性化

46 都道府県漫遊 【群馬県】

47 手前みそですが… 【大分県竹田市】



白髭大神

問い合わせ先 秋田県大館市産業部観光課
(0186)4317072
(写真提供 秋田県大館市)

(表紙写真はアメの露店)

問い合わせ先 秋田県大館市産業部観光課
(0186)4317072
(写真提供 秋田県大館市)

秋田県大館市で400年以上続いている伝統の「アメッコ市」。白髭大神(しろひげおかみ)が近くの山から下りて来てアメを買い求め、帰る際にその足跡を隠すため吹雪を起こすといわれています。

そして、言い伝えのとおり不思議とアメッコ市の間には雪が舞い、時には吹雪の中でのアメッコ市となることもあります。この言い伝えから「飴っ子おこし」の物語がつけられました。この物語は、気立ての優しい働き者の娘「おこし」が白髭大神に助けられたことから、病に倒れる人々のために薬のアメを作ろうと頑張り、夢枕に立った白髭じいさまの教えをうけ、とうとう薬のアメを作り上げるといふお話です。

アメッコ市の期間中(今年は2月8、9日)は言い伝えを再現した「白髭大神巡行」や忠犬ハチ公の生まれ故郷ならでは「秋田大パレード」などのイベントが行われ、大きなミズキの木にたくさんのアメが結び付けられた「ジャンボ枝アメ」は、晴天時には青空と、雪の日には白い雪とのコントラストが美しく、来場者の目を惹きまします。

表紙
アメッコ市



神戸市長 ● 久元喜造

「地域づくり」は「つながりづくり」

「地域づくり」は、「つながりづくり」ではないでしょうか。

人は、ひとりでは生きていきません。互いに支えあい、さまざまな形で「つながり」を持つことによって、はじめて生きていくことができます。

神戸市では、住民同士のつながりをつくることを目的の一つとして、平成2年に「神戸市ふれあいのまちづくり条例」を施行しました。概ね小学校区ごとに、さまざまな地域関係団体の方々により「ふれあいのまちづくり協議会（ふれまち協）」を自主的に結成いただき（全市で191協議会）、多様な地域活動を行っていたいています。さまざまな団体が「ふれまち協」という形できながりを持つことにより、人と人がつながって、地域の力が強まり、さまざまな可能性や取り組みが生まれています。

「ふれまち協」が結成されても、活動拠点がなかったので困ります。そこで、市内166小学校区すべて（190カ所）に、会議室・地域福祉活動コーナー・調理コーナー・談話コーナー等を備えた「地域福祉センター」を設置しています。そして、地域福祉センターの管理運営は、地域の「ふれまち協」が自主的に行っています。市民が主役となり、行政は主役を支えるという協働により、コミュニティ単位での「地域づくり」活動が行われています。

地域活動の多くは、無償の善意によって支えられています。しかし、地域の人間関係が希薄になり、地域活動の担い手の負担が大きくなると、担い手になっていただく方が減少するという傾向が出てきます。つまり、仕事が大変だから、なり手が減り、なり手が少なくなるから、負担が増えるという悪循環が生まれてきます。たとえば、民生委員は、地域の中での役割はますます重要になっていますが、民生委員の負担は増える一方で、退任された

ときに後任がなかなか見つからないという状況が生まれています。

そこで神戸市では、民生委員の負担を少しでも軽減するため、平成16年度から、民生委員の見守り活動をサポートする「民生委員支援員」制度を推進しています。また、高齢者の安否確認や話し相手を気軽に任せていただく「友愛訪問ボランティアグループ」制度を昭和40年代より続けており、民生委員をサポートしています。民生委員支援員と友愛訪問ボランティアを合わせますと、全市で7000名を超える市民のみなさんが活動されています。

人と人とのつながりは、コミュニケーションなくしては成立しません。近年、ネット上のコミュニケーションが注目されており、フェイスブックのように実名によるソーシャルネットワークが注目されていますが、ネット上におけるコミュニケーションの多くは、匿名性の高いものです。現代社会におけるバーチャルな世界の広がりはやはり無視できません。人間は、生身の肉体を持ち、五感を統合しながら世界と向き合っている存在です。人がネット上のコミュニケーションに過度に関わることは、人間という存在にかなり深刻な影響を与える可能性があるのではないのでしょうか。

リアルな地域社会における日常的なコミュニケーションは、やはりかけがえのないものです。リアルなコミュニケーションを活発にすることは、殺伐とした「無縁社会」の広がりとたたかい、「顔の見える地域社会」の再生につながっていくことと信じます。

ネット社会と「顔の見える地域社会」は、必ずしも背反するものではなく、共存し、補完し合うものでなければなりません。自治体には、ネットツールも有効に活用しながら、リアルな地域社会に基礎を置く、人間同士の「つながり」を再生させていく努力が求められています。

フットパスによる地域活性化



緩やかな丘陵が広がる「歌才森林公園コース」を歩く人々

●北海道黒松内町 (p10-11)



ラベンダーと田園風景。上富良野にはフットパスが11コースあり、雄大な自然を満喫できる

●北海道上富良野町 (p8-9)



最上川フットパスを歩く人々。案内サインと木橋が見える

●山形県長井市 (p14-15)



国民文化祭のプレイベントの様子。由利本荘市の矢島コースで

●秋田県由利本荘市 (p12-13)



里山研究家のケビン・ショート氏（右から3人目）がガイドするウォークの様子（結縁寺フットパス・草深の森で）

●千葉県印西市 (p18-19)



「武田の里コース」を歩く女性ら。のどかな田園風景が広がっている

●茨城県行方市 (p16-17)



ワイナリーでの試飲に、ツアー参加者も思わず笑みがこぼれる

● 山梨県甲州市 (p22-23)



ガイドの案内で歩くフットパスウォークイベントの様子。フットパスは観光振興にも寄与している

● 東京都町田市 (p20-21)



フットパスとして利用されているため池周辺の遊歩道

● 兵庫県稲美町 (p26-27)



日本初の本格的ロングトレイル「信越トレイル」。北の起点・天水山周辺の美しいブナ林

● 長野県飯山市 (p24-25)



雨の日でも楽しく歩けるフットパス。美里町の小崎棚田コースで

● 熊本県美里町 (p30-31)



亀井茲矩公墓所前を歩く「第1回鹿野往来亀井ウォーク」の参加者

● 鳥取県鳥取市 (p28-29)

まちづくりの手法として活用を ―地域活性化の可能性、大いに秘めるフットパス―



北海道工業大学准教授 ● 谷口尚弘

フットパスとは、日本フットパス協会の定義をみると(注1)、「森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと(Foot)ができるこみち(Path)」とされている。

社会の変化が早い今日において、「地域の歴史や文化を感じながらゆっくり進んでいこう」という、社会に対しある種の警笛をならしているようにも思える。同協会に入会している団体は、自治体や地域団体などさまざまであり、かつ、全国各地に点在している。また、各地域を廻っていると、同協会に属していない地域でもフットパスが存在しているところもあり、分野や上下関係などにとらわれない「ありのまま」の活動がフットパスであり、面白さである。実は、筆者も協会や所属している方々に恐縮であるが、フットパスを活用して地域づくりを実践している1人である。

地域づくりやまちづくりは、その地域に住んで

いる方々などがその地域やまちに関わり育んでいくことであるが、それらを包括できるのがフットパスであるように思える。フットパスは、地域づくりやまちづくりの1方法として大いに活用していくべきであろう。

1. フットパスの歴史

さて、日本でフットパスをつくらうという動きが本格化してきたのは10年ほど前であり歴史はまだ浅い。一方、フットパスの発祥の地である英国は100年以上の時をかけて整備されてきている。その経緯をみると、政治、経済、文化、生活など、様々な要素が絡み合いながら発展してきた。ここで、若干の誌面を割き、英国でフットパスが整備されてきた歴史的経緯について簡単にまとめてみたい(注2、注3)。

英国ではコモンズ(共有地)が至るところに存

在し、多数の農民はそのコモンズで農業などをおこなっていた。しかし、18世紀の初頭に土地所有者による土地の囲い込みが始まり、農民は放牧や農耕の機会が奪われ、都市での労働者となる。これにより、土地持ちの貴族と土地無しの労働者に二分化され、労働者は劣悪な都市環境のなかに閉じ込められる。

不平等な生活環境を余儀なくされた労働者は、抗議運動としてウォーキングを中心としたレクリエーションを始めるようになり、さらに20世紀の産業革命によって労働者の賃金上昇、有給休暇制度などにより、週末にウォーキングをする人(ウォーカー)が爆発的に増大していく。公有地が少ない英国においてウォーカーは、私有地へ自由に歩くことを求めるようになり、法的な権利(「歩く権利」)を獲得しようとして議会に法案を提案するが、幾度となく失敗に終わる。

しかし、1932年キンダー・スカウト集団侵

入事件を契機に法律が制定されることとなる。キングダー・スカウト集団侵入事件は、土地所有者の利益と労働者（ウォーカー）の自然保護との葛藤であり、自然を愛する英国人に大きな影響を与え、世論の後押しもあり「歩く権利法」が制定された。その後、1949年に「道」以外にも自由に散策できる権利「アクセス権」が新たに制定され、権利が強固なものとなる。「歩く権利」の内容は割愛させていただくが、英国のフットパスはウォーカーのみならず政府機関も援助・支援しており、これは歴史的な背景が大きく影響を及ぼしている。現在のフットパスの総延長は約20数万^{キロメートル}にも及んでいるという。それらは、長距離あり、短距離あり、農場や自宅の敷地内など私有地にまで道が続き、「歩く」という文化が大切にされているためであろう。

我が国では、まだ歴史は浅く英国と文化も異なるので、このような展開は難しいように思われるが、「歩く」楽しさを感じることはみな同じである。「歩く」ことにより地域の文化や文脈は大いに感じられ、ゆっくり進むことで次なる発想も生まれる。まさに、いまの日本にはフットパスが必要な時期ではないだろうか。

筆者は、建築学を専門として教育・研究に携わっているが、近年は持続可能な居住環境の形成を主たる研究としている。調査などで居住地を歩き廻っていると、その地域の文脈は様々であることから居住地の形成も様々であり、地域性の重要性を常々感じている。地域の良さを発見しながら地域の居住者と議論して地域づくりをしていくこと

が重要であり、人口減少社会のなかでそれらを続けながら地域づくりをしていく方法はないものだろうかと、いつも考えさせられる。

そこで、フットパスは地域づくりに寄与できるのではないだろうかと思い、私の研究室はこれまでフットパスによる地域づくりをふたつほど実践してきた。そのふたつの実践を紹介しながら、フットパスの魅力と地域づくりについて述べていく。

2. 居住環境づくりとフットパス

— 江差景観フットパスマップづくりを通して —

ひとつは、北海道江差町での地域づくり活動である。江差町は北海道では珍しく多くの歴史的建造物が残されている地域のひとつであり、これまでも「歴史を活かしたまちづくり」が進められてきた。しかし、ほかの地域と同様に人口減少や少子高齢化などによる地域の衰退が問題視され、安定的な地域づくりに向けての検討を依頼されたのが4年ほど前であった。

このような背景から、江差町に残されている固有の歴史文化や豊かな自然を活かし、街並みや景観資源の価値の共有、地域主導の景観形成を推進するために、北海道建築士会檜山支部、江差町役場、檜山振興局、地元小学校、私の研究室が協働しフットパスマップづくりを含めた「檜山景観プラットフォーム」を立ち上げた。その具体的な取り組みのひとつは「江差景観ポイント環境整備ワークショップ」の実施、いまひとつは「江差景観まち歩きマップ（江差景観フットパスマップ）」づくりである。

「江差景観ポイント環境整備ワークショップ」

では、地元の小学生の提案（江差町にふさわしいポケットパークの提案）をもとに、江差町所有の遊休地を整備した。これにより、子ども達の郷土愛の醸成や景観に対する意識の向上を図ることができた。また、「江差景観まち歩きマップ」づくりは、江差町の豊かな街並みや景観資源をあらためて地域住民や観光客などに認識してもらうと共に、豊かな景観を活かしたまち歩きの楽しさをマップづくりで提案した。

6ページの写真1のように、両面刷り、カラー、B4サイズの折りたたみ式が紙面としての完成版である。この「江差景観まち歩きマップ」づくりにあたり、マップ内容や活用方法について検討会を8回重ねたほか、まち調べやまち歩き、他地域のフットパスも体験した。「江差景観まち歩きマップ」づくりの検討事項としては、フットパスのルート、掲載する写真、イベントカレンダー、イベントスナップ、江差追分楽譜、江差の歴史、表紙などであり、表面を江差町の特徴を示した内容、裏面をフットパスルート地図とした。

このフットパスマップの主な特徴は、江差町の海、山、歴史的建造物を感じることができ、歩行者を飽きさせないようなルートにしたこと、単なるルートマップや地域の紹介書としてではなく、まち歩きで利用した後も写真立てとして保管できるようにしたこと、「景観ポイント環境整備ワークショップ」による子ども達の意見（「LOVE江差（あいラブ江差）」といったネーミングやルートのなかの店舗や建築物）を反映させたこと、などである。

検討会は、回を重ねるごとに意見が連鎖的に出

されるようになり、「考えてみるといろんなものがある。江差もまだまだ捨てたものじゃない」など、江差町の歴史文化や豊かな自然が多く点在していることを改めて気づかされた。また、このフットパスマップづくりをとおして、各々が有している知恵や情報を出し合うこと、意見をぶつけ合うことで、協働することの重要性を参加者は改めて認識し、多くの成果が得られた。その後も活動は

毎年継続されており、今年度は子ども達が提案したフットパスルートの立て看板を設置できた。行政、民間問わず地域の人々が協力することは地域づくりの基本であり、フットパスマップづくりを媒体とした地域づくり活動がおこなえたのではないだろうか。

3. 線と線を「つなぎ」、人と人を「つなぎ」フットパス

地域づくりは「ひとづくり」ともいわれている。その地域で活躍されている人、想いをもって過ごしている人、など様々であり、「ひと」は地域の貴重な財産である。「ひと」の想いを大事にしつつ、「ひと」と「ひと」を「つなぎ」ことが地域づく

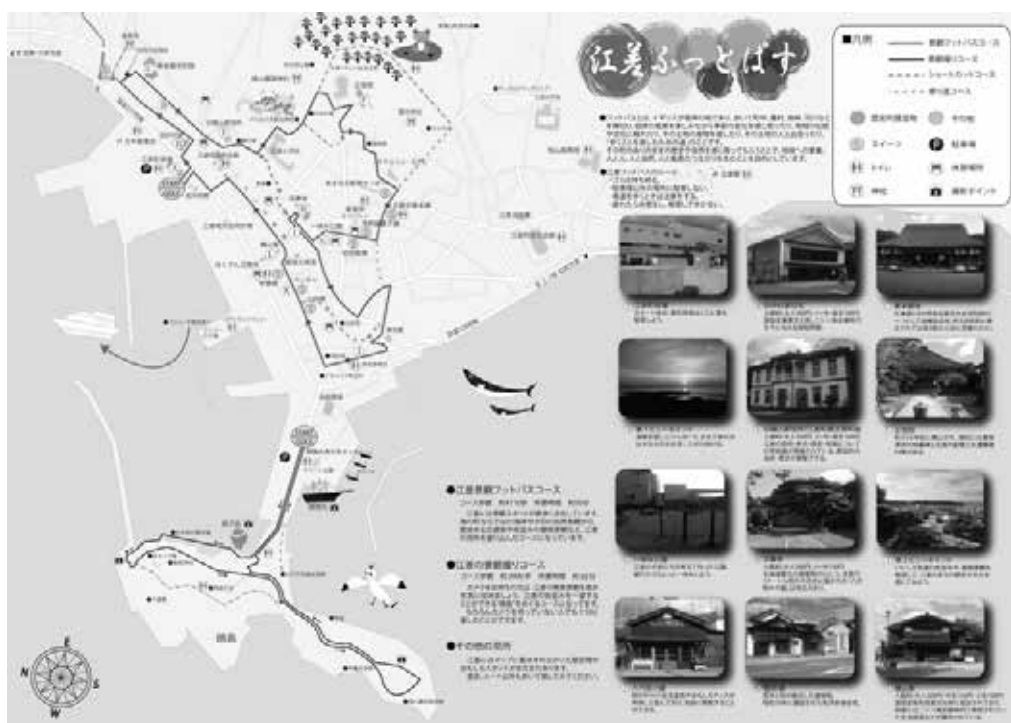


写真1 江差景観まち歩きマップ（江差景観フットパスマップ）

りには不可欠であり、フットパスには「つなぎ」という要素が大いに含まれていると思われる。それは、本書の特集にも組まれている「大雪ロングトレイルフットパス（NPO法人環境ボランティア野山人）」活動の支援と北海道内で開催されている道内フットパス大会に参加させていただき、大いに認識できた。「大雪ロングトレイルフットパス」活動の詳細内容は特集に譲るとし（本誌事例1参照）、本研究室で携わった「大雪ロングトレイルフットパス」ルートの模型づくりから、ふたつめの実践内容を紹介する。

北海道工業大学で建築を学ぶ学生は、設計演習等で建物の模型をつくるのが必須とされている。そこで、野山人の代表から本研究室の学生

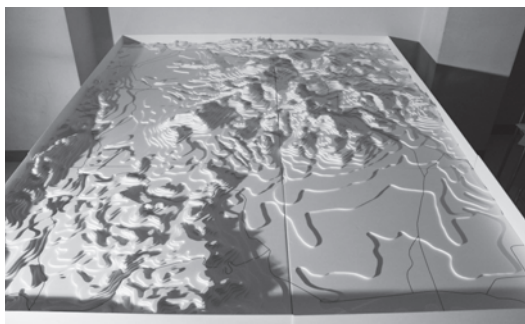


写真2 「大雪ロングトレイルフットパス」 ルートの模型



写真3 上富良野町で開かれた「全道フットパスの集い」(2013年)の様子

に、大雪山国立公園を取り囲む約450^{キロ}のフットパスルートの模型づくりの依頼があった。

模型づくりは、5万分の1の地図を35枚購入しつなぎ合わせ、その地図を用いて標高1000^{メートル}ごとのコンタ図面を作成し、その図面を基にスチレンボードで製作していった。これに黒テープで道路を示し、ルートや地名などを加えて完成とした。

模型づくりには本研究室の学生5名が携わり、約2週間費やし、横約2^{メートル}、縦約2・6^{メートル}の臨場感あふれる模型を完成させることができた(写真2)。

この模型のなかには1市15町村が存在しているが、そのなかにフットパスを有する市、町、村もある。これらをどうにか「つなぐ」ことができるか、フットパスには市町村間の境界が必要なのであろうか、普通の地図でも気づくことはできるが、模型にするとそれがより明快に気づかされた。

幸いなことに、模型づくりをきっかけにフットパス全道大会にも呼びがかり、模型づくりの説明と「大雪ロングトレイルフットパス」の今後

について講演させていただいた(写真3)。

その大会では、各地域でフットパス活動をおこなっている方々が集い、各地域のフットパスの状況などの議論となるが、それが懇親会となるとさらに話は熱を帯び、地域づくりの話にもなり、会話がどんどん弾んでいく。このように、これまで会ったことのない「ひと」同士がいつのまにか意気投合し、「つながる」ことになる。

フットパスの定義は冒頭に記したように「歩くことを楽しむ道」であるが、ただ歩くだけにとどまらず、「地域」と「地域」、「ひと」と「ひと」を「つなげる」ことも可能であり、地域を活性化させる可能性を大いに秘めていると思われる。

4. フットパスの今後の展開

フットパスには地域活性化としての要素が多く含まれていると思われる。筆者のこれまでの経験からまとめてみると、①江差町の例をとってみても、建物や風景景観のように建築

学や都市計画学からフットパスづくりもできることから、分野にかかわらず誰でも参加でき、地元の人や他地域の人を巻き込んだ地域間交流のきっかけづくりとなる。また、各地域のフットパスルートを「つなぐ」ことにより地域間連携も促進できる(ただし、行政の力も大いに必要となる)。

②自分たちの生活空間に他地域の人がやってくることで地元住民が

「見られる」という意識が作用し、フットパスルートを中心に地域をより良くしようという行動が生成される。③地域と地域のフットパスが「つながる」ことで滞在時間が長くなり、宿泊するとなった場合はビジネスが生まれ、またルート上に地元の特産物を提供するお休み処を設ければ宿泊同様にフットパスビジネスが生まれる(ただし、直接商業に結び付けるのではなく「ありのままの自然を感じ取ってもらう」ことを基本とする)、の3点があげられよう。

これまで急ぐための道(道路)を主としてつくってきた北海道において、フットパスは大きな意味をもつ。北海道は広大な自然や歴史文化が点在しており、発祥の地である英国と同様、フットパスをつくりやすい環境にあるため、現在では19のルートが存在している(注1)。今後、北海道を越えて様々な地域へと「つながつていく」ことが望まれよう。

最後に本論を執筆するに当たり、環境市民団体エコ・ネットワーク代表・小川浩一郎氏および環境ボランティア野山人代表・佐川泰正氏に助言をいただいた。ここに深く感謝の意を表します。

(注1) <http://www.japan-footpath.jp/> 日本フットパス協会

(注2) 小川巖…歩く文化の国、イギリスのフットパス事情、開発こうほう、pp24―28、2007・11

(注3) 泉留維…緑へのアクセスを求めて、approach第203号(株式会社竹中工務店 広報部)、pp4―5、2013・9

北海道の雄大な自然を感じ、「道を楽しむ」 —心を繋ぐフットパスを目指して—



NPO法人環境ボランティア野山人理事長

● 佐川泰正

はじまりと発見

北海道上富良野町の「環境ボランティア野山人」（後にNPO法人化）では2007年（平成19年）より、自然をテーマにした木芸展、絵画・写真展の開催や子供達との野外活動を行ってきました。そうした活動の中、同年秋に「エコ・ネットワーク」代表の小川巖先生（現在、酪農学園大学環境システム学部生命環境学科教授）と出会い、フットパスについてのお話を聞いているうちに、何か自分の求めているものが心と体に敏感に感じられ、さっそくその年の暮れ近くに、小川先生に上富良野町でフットパスに関する講演をしていただきました。

「歩く」という行為の深い意味について講演を聞いた人達は、何か自分の中に秘めていた可能性と無限の喜びを感じたようでした。どうということと申しますと、フットパスは歩くことと単純に考え、単なる健康志向のウォーキングと違って

たのですが、講演を聞いてそれが大きく違うことに気が付いたのです。

もちろん健康や運動は重要な要素となっていま

フットパスから生まれる資源



すが、フットパスは地域にある、ありのままの風景や町並みを楽しむ小道のことであり、その小道をどのように味わうかはそれぞれ個々の人生観と趣味・興味によって多様な可能性を秘めていることに気が付いたのです。私なりにフットパスから生まれる要素・資源を少しくどくはなりますが、一本の小道の周りに羅列してみようと思います（関連図参照）。

実はまだまだこの小道（小路）から生まれる地域の資源はいくらでも考えられます。本来あるべきフットパスの本質については、小川巖先生の「フットパスに魅せられて」という本に詳しく記載されていますので、ぜひ御一読していただければと思います。ここではフットパスについて私なりの考えを述べたいと思います。

道を楽しむ

私は結論から言えばフットパスは「道を楽しむこと」と思っていますし、楽しんでいるからこそ、いつまでも飽きずに続いているのだと思います。

現在、NPO法人環境ボランティア野山人ではフットパスの行事を企画し、それを主催して実施していますが、これとは別に私が代表を兼ねている「かみふらのフットパス愛好会」はフットパスそのものを楽しむ会として、約60人の会員が年に数回集まり歩くことを楽しんでいます。

会員各自が得意な分野を持っており、周囲の人に教えたり、教えられたりしています。

例えば野の花に詳しい人、山岳救助隊で山に詳しい人、また写真家や絵画好きの人、古民具に詳しい人、日本野鳥の会会員、農家、警察、お寺の住職、山菜取りの名人、地域の歴史に詳しい人、元社会科の先生、英語の先生など、仲間としての人の資源もたくさんあります。

またフットパス周辺の自然界からは言葉で言い尽くせない感動を得ることが出来る時もあり、改めてフットパスの奥の深さと無限の楽しみが潜んでいることに気が付きました。



フラワーランドパス。約4.5kmで、初心者でも楽しめる



千望峠パス。北海道100の道に選ばれている有名コース

フットパスの延長線上にロングトレイルがあります。私達「野山人」のメンバーは現在、大雪山国立公園の周囲約450^キを歩く長大なフットパス、「大雪ロングトレイル」の整備に取り組んでいます。

2011年から本格的に調査と暫定コースの設定を始め、すでに3人のメンバーが完歩しています。日本最大の広さをもつ大雪山国立公園約22万6000ヘクタール。その周囲を大きく東西南北に分

さて、「パノラマ絶景の町かみふらの」をキャッチフレーズに掲げ、「野山人」では現在、「かみふらのフットパス」として11コースを設定しています。

これらのコースは4・5・13^キで、全てのコースが上富良野町の中心から車で15分程度で出発点に行くことが出来ます。その特徴はなんと言っても北海道の壮大な景色の中を歩くことにより、自

かみふらのフットパス

フットパスという一つの道を通じ、利害関係を抜きにした者同士が同じ景観を共有し、同じ話題に溶け込み歩く、そこから人と人とのコミュニケーションが生まれ、新しいことを発見する。そして更なる展開へ向けての希望が湧く、そんなところにフットパスという道の魅力と感動があると思っています。

然との交感が出てくることだと思っています。地形の変化がほどよく自分と調和し、山も森も木も草も、川も風も小鳥たちも、私達と一緒に歩いているような気持ちになってくるのです。

思い返せば7年前に私が1人で歩いていた道も2人となり、4人となり、10人となり、2年後の2009年秋には「全道フットパスの集い」を上富良野の町で開催し、350人以上が「かみふらのフットパス」を歩くまでになりました。

2013年秋には第18回全道フットパスの集いが再度私達の町で開催され、350人以上のフットパスファンが一堂に会して2日間を楽しく過ごしました。その感動と余韻は未だ忘れることが出来ません。

大雪ロングトレイル

フットパスの延長線上にロングトレイルがあり

け、関係16市町村を人と道の繋がりだけを頼りに歩こうと試みました。

雄大な山岳風景を仰ぎ見ながら、人の歩く理想の道を探し、自然に対する畏敬の念を抱きつつ自然を慈しみ、触れ合うことから始める。そのとてもない大きなステージを「大雪ロングトレイル」と名付けました。また新聞やテレビで度々取り上げていただき、今更ながらその責任の重さを噛み締めています。

全国大会に向けて

さて2014年9月20、21の両日、日本フットパス協会やフットパスネットワーク北海道(FNH)のお力添えをいただき、NPO法人環境ボランティア野山人の主催で「全国フットパスフォーラム in かみふらの」が開催される運びとなりました。

2013年に全国大会を開催した九州美里フットパスの皆様方に御指導をいただきながら、富良野地方ならではの田園と丘陵のフットパス、そしてロングトレイルまで踏み込み、有意義な全国大会にしようと思っています。

新たなフットパスが日本各地に展開され、その道と道が少しずつ繋がり、北海道から九州・沖縄までを繋ぐ北海道五十三次に代わる平和で楽しい新たな日本の五十三次を目指して、日本全体が本当の温かい絆で結ばれることを祈りながら、皆様と共に頑張りたいと思いますので、なお一層の御助言をお願い申し上げます。

滞在型観光に向け、豊かな自然生かす ―「ブナ北限の里」のフットパス―



黒松内町企画調整課 主任 ● 桜井淳一

道南屈指の酪農の町

北海道黒松内町は、北海道西南部、札幌市と函館市のほぼ中間に位置し、日本海と太平洋をわずか28キロで結ぶ地域にありながら直接海には接することのない地理的特殊性を持っています。

町の面積のうち約76%が森林で、町のほとんどが黒松内低地帯と呼ばれる丘陵をなし、中央部を朱太川が貫流して、これを幹線とした中小河川の流域の平地部が農地となっています。

基幹産業は、酪農と種子馬鈴薯栽培を中心とする農業で、道南屈指の酪農の町です。

ブナ北限の里づくり

町の中央部には、ブナ北限域の代表として、学術的な価値の高さから昭和3年に国の天然記念物に指定された歌オブナ林があります。

町は、この天然記念物「自生北限の歌オブナ林」

を核とした豊かな自然環境と農村の牧歌的風景を潜在的資源と位置付け、可能な限り地域内の人材・資源を活用し、ヨーロッパの農村のように都市の人々を招き入れ交流する体験・滞在型のまちづくり「ブナ北限の里づくり」を平成元年にスタートさせました。

週末や長期休暇を田舎でのんびりと過ごすヨーロッパの習慣を取り入れるため、ブナ林散策や子供たちの野外活動の拠点となる自然体験学習宿泊施設「歌オ自然の家」や自然体験情報基地「ブナセンタ―」、オートキャンプ場、温泉、道の駅などの交流施設を次々と整備。さらに、ヨーロッパの農家民宿のように手づくりの食材でお客様をおもてなしするため、「特産物手づくり加工センター」でのチーズやソーセージの製造・販売、「特産物展示販売施設」での焼き立てパンやピザの製造・販売を行っているほか、



黒松内町のシンボルである「歌オブナ林」。国の天然記念物に指定されている

地場産ぶどうを原料としたワインも揃えています。

また、ブナ林や美しい農村景観を次代に伝えるため、景観や環境の保全を目的とする条例を制定し、助成制度を設けて住宅の色彩配慮や廃屋撤去などの修景整備にも取り組み、平成20年3月には景観法に基づく景観行政団体となり、優れた景観づくりを進めています。

フットパスの整備へ

こうした取り組みによって町の魅力は格段に向上し、今では年間約15万人が本町を訪れるようになりました。

しかし、交流人口の多くは通過型のドライブ観光が中心で、本当のまちの良さを分かっていたいておりませんでした。

イギリスでは、自然発生したような「フットパス」が国内にくまなく張り巡らされ、美しい自然



特産物手づくり加工センターで製造された特産品



「白井川・赤井川コース」の道標

さらに平成25年度は道の駅から平成23年にオープンしたチーズ工房「アンジュ・ド・フロマージュ」までを結ぶ第5のコース「白井川・赤井川コース」(約10^{キロ})を選定しました。

景観や懐かしい田園風景、古い街並みを結び、多くの人々がその散策を楽しんでいます。

本町でも都市の住民に車では見過ごしがちなまちの自然や環境のすばらしさを注意深く見つめていただくために、「歌才自然の家」や「ブナセーター」など既存の交流スポットを有機的に結び付ける「フットパス」を整備することが有効と考えました。

そして町広報誌でフットパスを紹介するとともにボランティアを募集し、平成16年6月には「黒松内町フットパスボランティア」を組織して、フットパスの取り組みがスタートしました。

まずは、本場イギリスなどへの先進地視察を実施。次にコースの調査、そして、これまで幾度もまちに訪れていた都市の方々の協力もいただいて廃道同然だった道路の笹刈り・草刈り作業などを重ね、ようやく最初の「チョボシナイコース」を整備し、同年10月に歩き始めのイベントを開催しました。

5コースを設定、滞在型観光を振興

このコースは、黒松内町の市街地と道の駅のある白井川地区に挟まれる東山を越える起伏に富んだ全長約10^{キロ}で、道端には小動物の足跡や山ぶどう、コクワ、どんぐりといった実のなる木などがあり、とても魅力的な自然に接することができるコースとなりました。

コース上には廃材を利用した手づくりの道標を設置、案内プレートの進行方向は矢印ではなく、ボランティアのアイデアで足跡の向きで示しました。

このほかにも、「歌才自然の家」から「特産物手づくり加工センター」までのなだらかな草地在が広がる「西沢コース」(約10^{キロ})、チョボシナイコースと西沢コースを接続し、市街地を縦断する「寺の沢コース」(約2^{キロ})、既存の散策路の一部を利用し、本町のシンボルである天然記念物「歌才ブナ林」の入り口に接する「歌才森林公園コース」(約4^{キロ})を選定しました。

これらの5コース、総延長約36^{キロ}のフットパスの整備によって、「歌才自然の家」を利用し、1泊2日で町内に点在する交流施設や豊かな自然、優れた農村景観など、まちの魅力を存分に楽しめるようになり、体験・滞在型観光の基盤が固まりました。

フットパスで豊かなまちづくり

このように本町は、今ある道を利用し、下刈りをするなどして自然に負荷を掛けることなく新たに歩くことのできるフットパスを整備しました。またフットパスの整備に当たってはあまり費用をかけず、町とボランティアが手を携え、役割分担しながら一緒に汗を流してきました。

近年は、フットパス自体の知名度も上がり、週末や祝日のほか、平日でもコース上を散策する来訪者の方々を多数見かけるようになりました。

年4回ほど開催する歩くイベントでは、町内外から50名ほどが参加し、フットパスで結ばれた交流スポットでは大きな経済効果が生まれています。

今後も、健康増進や観光面での経済効果などフットパスの持つ大きな価値について多くの方々に理解していただくとともに、まちの豊かな自然環境や優れた農村景観を持続可能な利用の仕方では来訪者に提供しつつ、農家や商店街など地域と連携した「黒松内流」のフットパス事業を展開し、フットパスによるまちづくりを推進していきたいと考えています。

国民文化祭を契機に「由利本荘版フットパス」 —先進地に学び、独自のスタイル目指す—



由利本荘市企画調整部国民文化祭事務局
兼商工観光部観光文化振興課 主査

・大山 慎

秋田県内最大の面積

秋田県由利本荘市は、平成17年3月22日に本荘市、矢島町、岩城町、由利町、大内町、東由利町、西目町及び鳥海町の1市7町が合併し、秋田県最大の面積（神奈川県約半分）を誇る市として誕生しました。霊峰・鳥海山を中心に、人々の生活に潤いをあたえてきた一級河川・子吉川、白砂と美しい夕日の魅力あふれる日本海と、山、川、海の自然が織りなす風光明媚な都市です。今回は、本市で取り組んでいる「由利本荘市版フットパスの軌跡」について紹介します。

北杜市のフットパスに感動

平成25年4月、今年秋田県で開催される「第29回国民文化祭・あきた2014」において、市の独自事業として「鳥海山が育む多彩な文化」をテーマに「フットパス」を実施することが決定しまし

た。しかしながら、本市では「フットパス」に取り組むのも初めて、言葉を知っている人もほとんど無く、全く手探り状態の不安な出発となりました。

取りあえず「百聞は一見にしかず」ということもあり、平成25年6月、「第28回国民文化祭やまなし2013」のフットパス（北杜市）に参加させていただきました。

参加前の私のフットパスに関するイメージは、「地域の文化財や名所などをガイドが同行し歩く観光的ツアー」プラス「地域の魅力体験（伝統芸能鑑賞、そば打ち体験など）」というものでした。

しかし、北杜市のフットパスは魅力的なコースに加えて、役割分担や時間配分、休憩時の対応など、細部にわたるまでのおもてなしが準備されており、いかに自分が勉強不足か痛感させられました。

また、この視察により、参加者一同、フットパスの素晴らしさに魅了され、由利本荘市のフットパスも「国文祭一回限りのイベントではなく、そ

の後も継続する」との新たな目標を掲げることになりました。

北杜市の関係者招き、研修会開催

視察での衝撃をスタッフで共有し、国民文化祭のプレイベントに臨みたいと思い、山梨県北杜市でフットパスに取り組んでいるペンション「ペアハット」のオーナー・多賀純夫さんとインタープリター（自然ガイド）の五味愛美さんを講師に迎えて、平成25年8月、地元の案内人を対象とした研修会を開催しました。この研修会では、北杜市のフットパスのノウハウを教えていただくとともに、実際に由利本荘市のプレイベントコースを歩



山梨県北杜市の関係者を講師に迎えた研修会



フットパス参加者はそば打ちも体験した



石窯ピザ作り体験の様子

いてアドバイスもいただき、フットパスの事業を具体的にイメージすることが出来、大変参考になりました。

◆◆◆ 国民文化祭プレイベント

プレイベントの「由利本荘市版フットパス」は、城下町・修験体験・里山体験などのテーマに沿った全10コースを設定し、9月から10月にかけて開催しました。10コースは約3〜約5^{キロ}で、2、3時間かけてゆっくり歩くように設定しました。

このうち里山体験コースでは、人と人との交流

もフットパスの大きな魅力の一つと捉え、地元の方にご協力をいただき、ウォーキングの後、番楽鑑賞や座禅体験、そば打ち体験、石窯ピザ作り体験をするメニューを加え、参加者からはとても好評でした。こうしたプレイベントには延べ320人余りが参加し、今年の本開催に向けて確かな手応えを感じました。

コースの概要や開催状況、アンケート結果については市の国民文化祭専用サイトに掲載しています (<http://kokubunsai.net/genre/>)。

一方、平成25年11月には熊本県で開催された「全国フットパスサミット in 美里2013」に参加

しました。北は北海道から南は沖縄まで大勢の方が参加しており、特に交流会での熱気は今でも忘れることができません。また、素晴らしい感動を与えてくださったホスト役の美里町フットパス協会の皆様には感謝しています。

◆◆◆ 地域を元気にするフットパス

国民文化祭のプレイベント開催や他地域のフットパスに参加して実感したのは、「フットパスは地域を元気にする」効果があるということです。

地域再発見による地元学や交流人口増加に伴う観光振興、適度な運動による健康増進など多岐にわたった効果が考えられます。中でも一番肝心なことは、参加者、受け入れ側、スタッフなど全ての方が素晴らしい空間を共有できることです。そして、その感動を求めて螺旋（らせん）のようにフットパスの活動が続いていき、地域がますます元気になっていくと考えます。

国民文化祭の本開催（今年4〜10月）では、由利本荘市の魅力を十分に満喫していただけるように、プレイベントコースに新コースを加えて、全13コースを最適切な時期に設定します。まだまだ、至らない点は多々あると思いますが、関係スタッフの熱い心はどこにも負けないとの自負を持ち、皆様に少しでも満足していただけるように全力で頑張りますので、ぜひ由利本荘市にお越しください。

清流・最上川を利用し、水辺の散策ルート ―フットパスで交流人口増加と活性化目指す―



山形県長井市まち・住まい整備課課長 ● 浅野敏明

水と緑と花のまち・長井市

山形県長井市は朝日、飯豊、出羽の緑豊かな山系に囲まれ、美しい散居集落を潤しながら、母なる川・最上川、置賜白川、置賜野川の大きな清流が貫流し、かつては長井市から下流を最上川と呼んでいました。「四季均等」と言われる恵まれた環境にあり、豊富な水、豊かな緑、そして季節ごとに桜やつつじ、あやめ、はぎなどの花が咲き誇ります。

市街地を流れる最上川は、その舟運により古くは北前船による海運の輸送路を経由して京都などの風習や文化を取り入れ、特に長井市では米沢藩の表玄関として、大きな問屋や豪商が成長し、商業のまちとして独特の文化が生まれました。

官民協力でフットパス整備

長井市のフットパスは、2002年に国土交通

省のフットパスモデル地区として選定され、翌03年度から白川ルートの整備に着手したのが始まりです。

その後、最上川下流域の市街地までのフットパスとして、川沿いルートとまちなかのルートを検討するため、市民13名によるワークショップ「フットパス推進会議」が発足。勉強会や検討会を重ね、フットパスルートの選定のほか、案内標識やガイドマップのデザインの検討、更にホームページの制作や運営など、それぞれの得意分野で持ち味を発揮し、2005年にはその集大成としてガイドマップ「みずはの小道」を発行しました。

このように長井市のフットパスは官民が協力して整備しており、この長井のフットパス「みずはの小道」では市内の見どころを盛り込んだ10コースを用意しています。

フットパスの広がり

こうしたフットパスの取り組みを全国に発信



最上川フットパス。飛び石を伝って歩く人々

し、フットパスによってまちづくりに取り組んでいる各地域との情報交換などを目的に2006年6月、長井市の主催で「全国フットパスシンポジウム in ながい」を開催しました。これが2008年に町田市や長井市などが発起人となり、「日本フットパス協会」を設立するきっかけとなり、フットパスの取り組みが全国に広がる足がかりとなりました。

最上川流域でも上流域の長井市をはじめ3市6町でフットパスの整備が進んでおり、最上川流域全体のフットパスのネットワークづくりを目指しています。

2009年から取り組んでいる国土交通省の「かわまちづくり」支援制度により、舟運時代の



長井市のまちなかを通るフットパスの様子



石畳の道を歩く人々

フットパスは、歩きながら景観や歴史・文化を楽しむ小道で、食べ歩きや交流の場になっても良いのです。それぞれの楽しみ方です。それが本来のフットパスであり、歩くだけのウォーキングスポーツとは違うもので

す。市外からの来訪者が多くなってきたことにより、ボランティアの取り組みも盛んになってきました。最上川沿いの地区住民などの美化活動、桜つつみの植栽をはじめ、カヌー愛好会や植物愛好会、文化財保護協会など、それぞれの活動により、フットパスは多くの市民に親しまれるようになりました。

フットパスはありのままの自然、歴史や文化などの地域資源を活用することにより、観光振興や地域の活性化に役立つほか、市民のための憩い空間にもなります。また多額の費用をかけず、手軽に整備できることもあって、長井市ではフットパスによる地域づくりに力を入れてきました。

◆◆◆ 今後の課題と展望

しかし、フットパスの整備を進めていく中で、新たな課題も見えてきました。コース沿いの景観に配慮した維持管理は最低限必要ですし、利用者に分かりやすいガイドマップの作成や案内サインの整備、トイレ、休憩施設の設置も課題です。また、地元食材を提供する食事処やお土産を気軽に買える店も欠かせません。

このため2012年から事業化になった国土交通省の都市再生整備計画事業を活用して、「かわの駅」をフットパスの拠点施設として整備するとともに、利用者のニーズに応じた各種施設も設置し、さらに観光交流人口の増加を図り、地域の活性化に結びつけたいと考えています。

歴史・文化など地域資源を活かした地域づくりとして、新たなフットパスルートやまちとかわを結ぶルートの整備、船着場や舟通し水路の整備など、更に魅力あるフットパスルートとガイドマップもできました。

今後は「かわまち」の長井として、フットパスの拠点となる「かわの駅」と河川緑地公園の整備を進めるとともに、フットパスによる観光交流人口の増加を図り、地域活性化に結びつけていきたいと考えています。

一方、2011年10月には日本フットパス協会と協力して「日本フットパスシンポジウム in ながい」を開催。テーマを『かわまち、まちーかわへ歩くフットパス』として、フットパスを活用

した「かわまちづくり長井」を全国に発信しました。

2日目は3コースに分かれてフットパスを体験、それぞれ多くの参加者に楽しんでいただきました。このうち最上川からまちなかのフットパスコースや長井溪谷などを廻るコースでは、地元住民との交流や昼食の芋煮や餅などが大好評でした。また広域連携の白鷹・朝日町のフットパスコースでは、フラワー長井線で雄大な西山を眺めながら移動。産直ではたくさんのお土産を購入していただき、地元の活性化にも貢献していただきました。

◆◆◆ ボランティアも活躍

フットパスを整備し、観光誘客めざす —水辺や里山、ありのままの風景を利用—

行方市商工観光課 ● 宮川貴弘

震災で観光客減少、フットパスに活路

行方市は茨城県の東南に位置し、霞ヶ浦、北浦の2つの湖に囲まれ、水辺や河川沿いには田園風景が広がり、里山には山百合の群生地、行方台地では60品目以上の農作物が栽培されるなど自然環境に恵まれています。また1300年前に編纂された常陸風土記には行方に関する多くの記述が残るなど古くからの歴史があるまちです。

平成22年度から行方市観光協会が日本フットパス協会に加入していましたが、行方市としてフットパスに本格的に取り組むようになったのは、東日本大震災の影響で行方市を訪れる観光客が減少したり、行方市の観光物産館の売り上げが落ち込んだりしたことが大きなきっかけです。フットパスは多額の費用をかけてイベントを行うのではなく、昔から地域に残る田園風景、里山、水辺などありのままの風景を利用することができることも魅力でした。

水辺や里山生かし、6コース設定

フットパスのコースを決めるために商工観光課の職員が震災後、約1年かけて市内の里山、水辺、田んぼ、商店街、神社、お寺、史跡など色々な場所を探し歩きました。歩くことによって今まで気がつかなかった山城跡に続く苔むした階段、畑で作業する農家の方が使う道、舗装されていない川沿いの道、土地の所有者が個人で整備した眺めのいいウッドデッキなどを見つけることができました。私有地や個人所有の物もありますが、持ち主と相談して許可をもらい、コースに入れることにしました。

このようにして出来上がったフットパスのコースは以下の6カ所になります。

①「武田の里コース」は舗装されていない武田川沿いの道、田んぼ、里山、眺めのいいウッドデッキを楽しむコース。

②「麻生陣屋コース」は江戸時代から明治まで

一度も国替えをせず麻生の地を治めた麻生藩ゆかりの地を巡るコース。

③「玉造ふれあいコース」は霞ヶ浦の水辺と江戸時代に玉造の地を治めた水戸藩の歴史にふれるコース。

④「山田の里コース」は北浦でたくさん栽培されているハス田が広がり、水辺では野鳥が多く見られ、野鳥の観察小屋もあるコース。

⑤「白浜コース」は北浦に架かる北浦大橋を眺め、北浦の水辺を巡るコース。

⑥「三味塚古墳コース」は前方後円墳を復元した三味塚農村古墳公園、常陸風土記に記述されている地を巡り、太古の歴史にふれるコース。

これらのコースは全長5〜6^{キロ}で、いずれも行方豊かな自然や歴史遺産を生かした散策路になっています。

見どころや消費カロリーをパンフで紹介

6つのコース設定に合わせてパンフレットも作成しました。全体の概要版パンフレットには各コースが行方市内のどの場所に位置するのかが分かる位置図、コースの目印となるような建物、見どころの風景写真、コースの距離、所要時間、消費カロリーも掲載するようにしました。また「武田の里コース」、「麻生陣屋コース」、「玉造ふれあいコース」についてはコース案内を詳細に掲載し、大きく、見やすい詳細版パンフレットを作成しています。これらのパンフレットは市内の公共施設、道の駅に備えているほか、行方市のホームページからもダウンロードできます。



「武田の里コース」のウッドデッキ。個人が所有しており、眺めのいい人気スポット



麻生藩ゆかりの地を巡る「麻生陣屋コース」。観光ボランティアの案内で歩く様子



「玉造ふれあいコース」を歩く人々

「武田の里コース」は道案内の看板も設置してあります。今後は他のコースでも設置していく予定です。

ありのままの風景を楽しんでもらうためにはコースの整備が欠かせません。舗装されていない川沿いの道では草が伸びるため商工観光課の職員が草刈りを行っています。

高いフットパスへの関心、都内からバスツアーも

平成24年11月3、4の両日、日本フットパス協会の全国大会「2012日本フットパスセミナー」を行方市で開催しました。

4日には「武田の里コース」「玉造ふれあいコース」を利用し、散策を楽しみました。参加者からは「行方ののんびりした雰囲気よかった」「ウッドデッキがすごくよかった」「地元の方の素朴な

おもてなしがよかった」と好評でした。茨城県で初めて行われたフットパスの大会だったためNHK水戸放送局や茨城新聞など多くのマスコミから取材を受けました。

その後、フットパスのモニターツアーを2回行いましたが、参加者からは「実家の田舎みたいで落ち着く」「ガイドの説明が分かりやすかった」などと高い評価をいただきました。都内で行われた旅行会社の商談会でもフットパスへの関心が高く、なかでも「ニュー東京トラベル」は都内からフットパスを体験するバスツアーを実施してくれました。

平成25年度は市民にフットパスを知ってもらうために健康増進課と協力してウォーキング愛好家の団体にフットパスのコースを歩いてもらうようにパンフレットを配布し、フットパスを体験していただきました。

平成25年10月3日にはフットパス、温泉、彼岸

花まつりなどの市内観光を楽しむバスツアーを企画しました。茨城県内ではまだまだフットパスを知らない方も多く、また行方市を訪れたことがないという方が多いためフットパスだけでなく温泉、彼岸花まつりなどの市内観光をメニューに入れることでフットパス以外にも楽しめるように配慮しました。バスツアーには約40人が参加し、「霞ヶ浦の湖岸が気持ちよかった」「行方はあまり知らなかったが、古い歴史があり、温泉もよかった。今度はお友達と一緒に来たい」などと好評でした。

フットパスの魅力高め、観光誘客を

行方市のフットパスの取り組みはまだ始まったばかりで課題もあります。市民の認知度が低い上、行政主導でフットパスに取り組んでいるため民間の団体や地域で協力してくれる方はまだまだ少ないのが実情です。また観光ボランティアにフットパスコースの案内をお願いしていますが、観光ボランティアが少なく、さらに増やしていく必要があります。

今後は、こうした課題を少しずつ解決しながら行方のフットパスをさらに魅力あるものにし、観光客の増加や地域の活性化につなげていく方針です。

都市住民を呼び込み、農村地域を活性化 ―フットパスからはじまる里山保全策―



NPO法人ラーバン千葉ネットワーク副理事長

● 丹澤正直

北総台地にできた千葉ニュータウン

千葉ニュータウンは、千葉県印西市・白井市・船橋市の一部を含めて、北総台地の上にできた新しいまちだ。中心の駅、千葉ニュータウン中央駅から、特急に乗ると成田空港まで20分余り、東京都心まで40分の距離にある。

このニュータウンは、海拔3〜12^{メートル}の台地の上に開発されたので、台地を囲む斜面林を境にして昔から続く田園地帯はほとんどそのまま残されている。田園地帯を人の手の入った公園とみなせば、広大な公園に囲まれた利便性の高い都市機能を備えたまちが存在することになる。

ラーバン千葉ネットワークとは

私たち、「ラーバン千葉ネットワーク」は、この地域がもつ特性に着目し、台地の上のニュータウンが開発され続けても周辺の田園地帯の自然を

守っていけば、田園と都市とが互いに助け合い共生する理想的なまちづくりが出来る、旧市街地に住む住民が、ニュータウンに住む人たちに呼びかけて始めたNPOだ。

里山観察会や里山保全活動、北総里山研究グループの立ち上げなどを行い、里山に関心を持つ人を育成してきた。またそのような活動の紹介や市民交流の場として「コスモス里山まつり」を開催し続けてきた。

今では同じような志を持つ市民団体が多数現れ、北総台地周辺が、私たちの目指す街に徐々になってきたのを実感している。

北総台地に展開するフットパス活動

私たちの活動の中で、参加者に好評なのが、毎年春と秋に行われる「里山水系ウォーク」で、平成25年で22回目、すでに10年以上続けていることになる。

実は台地であるニュータウンから南には印旛沼

を経て東京湾に、北には手賀沼を経て利根川につながる小さな川の流れがいくつかある。その水系の周りには、稲作文化が昔から花開いていた。

田園地帯に広がるこのような自然と文化をひとつひとつ拾い出し、ガイド付きで見学していくのが、このイベントだ。各コース8〜10^{キロ}ほどの距離をつなげていく。つなげていく道は農道だ。お昼ごはん付きのイベントで、コース近くの農家にお願ひして、地元食材のお弁当を作っていたたいる。

結縁寺フットパスの魅力

ウォークコースのうち、結縁寺コースはこの地域を特徴的に表している。もともとポピュラーな歩き方は、「千葉ニュータウン中央駅」から「印西牧の原駅」まで歩く全長9^{キロ}のコース。

歩いて10分ほどで、ニュータウンが里山地域と突然つながる。さらに歩き続けると、結縁寺地域に着く。1300年前から続く農村風景が、そのまま残っているのに驚かされる。お寺や神社、溜池のある風景。いずれも里山の構成には欠かせない。

ここを、外国人の視点で紹介してくれた里山研究家・自然史ライターのケビン・ショート氏（東京情報大学教授）が典型的な里山風景として「日本の里100選」に推薦した理由も良くわかる。農家の人達が守ってくれる農道を歩くので、大変歩きやすい。私たちが中心になって整備し、いまや林床植物の宝庫になった「草深（そうふけ）の森」を歩くのも楽しい。



里山水系ウォークの昼食風景



結縁寺フットパスの様子



林床植物の宝庫「草深の森」

ゴールはまたニュータウンの印西牧の原駅。ショッピングモールで食事をするのもいいし、日帰り温泉を楽しむのもいいだろう。

◆◆◆ 今後の展開と課題

里山自然が、なぜ守られてきたか理由を考えて見ると、そこに産業が成り立っていたからだ。炭をとり、薪をとる。堆肥にするために落ち葉を集める。食料を生産する。そのような生産活動が、代々なされてきたからこそ、結果として、自然が守られてきた。

農村地域でも少子高齢化が急速に進む中で、北総地域だからなしえる活性化策は、都市住民の力

を借りて、里山地域に新しい産業的価値を見出し、いくことが、キーポイントではないかと思う。

里山自然を維持するために、この地域の様々ところで、自然環境の保全に目覚めた市民活動団体がそれぞれの働きをしている。そういう人たちが活動するフィールドをつないでいくフットパスを整備し、グリーンツーリズムやエコツーリズムなどの考え方を取り入れて地域を、人をつないでいくことも活性化策のひとつになっていくだろう。

私たちは現在、「里山水系ウォーク」を開催することによって紹介してきた北総の各地域のガイドリーフレットも作成している。地域のガイドが出来る人材も増えてきた。やがて、この地域のフッ

トパスを楽しみ、市民の交流が生まれ、里山保全に参加してくださる方が増えるのを期待している。

また、例えばまちづくり・地域振興・生涯教育・都市整備等々、どうしても縦割りになりがちな行政組織の人達も、同じまちに暮らす市民としての目線で、市民活動をしている人たちの動きを捉え、縦割りの壁を越えて協働事業化の道を真剣に考えていただければ、このような活動が一層発展していくのではないだろうか。

それが地域全体の活性化につながるものと信じてやまない。

フットパスで町田の魅力を再発見 —22コースを設定、観光振興にも大きく貢献—



町田市経済観光部産業観光課 担当係長

● 牛腸哲史

◆◆◆ 多摩丘陵の面影残す商業・住宅都市

町田市は東京都の南端にあり、半島のように神奈川県に突き出た人口約42万6千人（平成25年12月現在）のまちです。都心から南西に30〜40^{キロ}の距離にあり、昭和40年代にベッドタウンとして急速に人口が増加し、都市化が進みました。また、古くから物流や交通の要衝であり、小田急線とJR横浜線の町田駅を核とする中心市街地は、周辺地域からも多くの人が集まる商業集積地として発展しています。

その一方で、昔ながらの多摩丘陵の面影も北部地域を中心に色濃く残っています。その魅力は、高台からの眺望、緑豊かな雑木林、里山や道端の風情、社寺、古道、城跡、野仏といった歴史遺産など多様です。特に景観については、いくつも小さな丘陵や谷戸（やと）丘陵が浸食され谷のようになった地形（が折り重なっており、また、よく見るとそれぞれの谷戸が異なった趣を持っています

たいへん美しいものがあります。

◆◆◆ 環境保全と観光振興の手段として

こうした町田に息づく様々な資源の魅力を広く伝え、その大切な財産を守り後世に引き継いでいくための手段として、平成12〜13年ごろから市内の市民団体の間でフットパスの活動が始まりました。

市民団体が行うフットパスの活動に市職員も個人的に参加するようになり、その後、行政内部でもフットパスの活動を支援していきこうという気運が少しずつ醸成されていきました。

さらに、観光スタイルが従来の「通過型」・「団体型」の物見遊山の観光から、訪れる地域の自然・生活文化・人とのふれあいを求める「体験型」・「交流型」・「個人型」の観光へと転換していく中で、平成19年に策定した町田市中期経営計画において、従来はほとんど取り組みを行ってこなかった観光振興が重点事業の一つとして位置づけられました。

した。これを機に、フットパスを市内全域につないでいくことが観光振興の観点からも注目され、フットパスの振興を通じて町田の魅力を再発見、創造、発信していく取り組みが開始されました。

◆◆◆ 魅力ある22コースを設定、ガイドマップも

まず手がけたことは、フットパスコースを開発することでした。コースの開発にあたっては、長年、多摩丘陵を中心にフットパス活動を行っている「NPO法人みどりのゆび」と協働し、平成19年度から4年間かけて市内全域にわたる22コースを設定しました。

各コースは、誰でも気軽に楽しみながら歩けるよう、距離を5〜8^{キロ}とし、各地域に残る昔ながらの里山風景、雑木林、田畑、古街道、歴史の面影などを繋いだ魅力あるフットパスコースが完成しました。

また、「NPO法人みどりのゆび」では、歩く人にとって価値のある「立ち寄りショップ」など民間施設を独自に取材し、それらの情報を盛り込んだ有料のガイドマップの作成に取り組み、平成21年に『まちだフットパスガイドマップ』（12コース）を、平成23年に『まちだフットパスガイドマップ2』（10コース）を発行しました。この2冊のガイドマップは、市内の主な書店で販売しており、これまでに合計で約1万5千冊の販売実績があります。

◆◆◆ 案内板や道標を設置、トイレも確保



フットパスコースに設置した道標

さらに、里山地域においては、排泄物を微生物の働きで分解するバイオトイレの設置を進めており、現在4カ所で設置が完了しています。

また、トイレの確保も重要な課題です。フットパスコースには、トイレの乏しいところが多いことから、市では、店舗や寺社に対してトイレ開放の協力を要請し、協力いただいた店舗や寺社を「公共トイレ協力店」「トイレ開放協力寺社」として紹介するとともに、歩く人たちに対しても公共施設や店舗などの利用を呼びかける取り組みを行っています。

フットパスコースの開発とガイドマップの発行に伴い、このコースを歩く人たちが増えてきました。ガイドマップを片手に歩く人たちが、設定されたコースで迷わないように、コースからはずれることなく、楽しく安全に歩いていただくことが大切です。そこで、市では、平成21年にフットパスコースに設置する案内表示基準を作成し、それ以降、順次、案内板と道標の設置に取り組んでいます。



環境にやさしいバイオトイレ

フットパスコースの中でも特に人気が高いのは、多摩ニュータウンに接する市北部の小野路地域のコースです。この地域の中心には、江戸時代に大山詣り（現在の神奈川県にある大山＝標高1252メートル）に登ってお参りすることの宿場としてにぎわった小野路宿があり、当時そこにあった6軒の旅籠のうちのひとつである旧「角屋（かどや）」を改修して再整備した「小野路宿里山交流館」が平成25年9月末にオープンしました。

ジターセンターの役割を担っています。地元住民で組織された「NPO法人小野路街づくりの会」と市が協働で施設を運営しており、フットパスコースや交通機関等の情報提供、地元産の野菜・果物や工芸品等の販売、地元産の食材を使ったおもてなし料理の提供などを行っています。施設のオープン以来3カ月で約1万3千人が訪れ、フットパスコースを歩く人にも好評です。

今後は、地域で農業をされている方、農地や里山の保全再生に取り組んでいる団体など多くの地元関係者にご協力いただき、地域の特色を生かしたイベント、体験教室、展示などを充実させていきたいと考えています。そして、この施設を拠点として、地域環境の保全と地域の活性化につながる様々な取り組みが広がっていくことを期待しています。



平成25年9月にオープンした「小野路宿里山交流館」

「ぶどう園ワイン」のまちを活性化 ―朝市会場を起点に、ガイドツアー開催―



勝沼フットパスの会長 ● 小澤正光

不思議な魅力の虜に

晩秋の勝沼は快晴が多い。澄み切った青い空、雪をいただく南アルプス、黄色や赤に色づくぶどう畑。桜や桃の花が咲く春や、緑の葉が広がる夏の装いもよいが、収穫を終えた紅葉の季節は、色合いに艶があり鮮やかだ。勝沼フットパスの魅力は何と言っても、ぶどう畑や盆地を囲む山々が四季ごとに織り成す、色彩豊かな景観だと思う。

最近は一ユックを背に歩く人が増えている。「ぶどう畑の間の狭い道がおもしろい」「ぶどうやワインの歴史が興味深い」「学びの要素があり、得した気分になる」などなど。「勝沼フットパスの会」が開くガイドツアーに参加する皆さんは、異口同音に楽しそうに話す。

ガイドを務めるスタッフの表情にも充実感があふれる。私たちが「フットパス」に出会ってから、まだ10年も経たないが、気がつく、フットパスの持つ不思議な魅力（それは「魔力」と言い換え

てもよいかもしれない）の虜（とりこ）になってしまったようだ。

理屈抜きにおもしろい

甲府盆地の東の玄関口に位置する山梨県甲州市は、平成17年に塩山市・勝沼町・大和村が合併して誕生した人口3万4千人余りの市である。ぶどうや桃などの果樹、ワインや枯露柿などの加工産業が盛んなほか、日本百名山の大菩薩嶺を中心とした豊かな自然、武田家にゆかりの深い神社仏閣など、有数の資源に恵まれた地域である。

中でも勝沼町地区は、日本のぶどう・ワイン産業の発祥地として知られ、観光ぶどう園やワイナリーなどの施設には年間200万人を超える人々が訪れている。

勝沼フットパスの会は合併前、旧勝沼町時代に行政から委嘱された「まちづくりプロジェクトチーム」のメンバーが母体となっている。観光客数が伸び悩むなか、同プロジェクトでは、ぶどう

狩りとワイン工場の見学という旧来の形態だけでなく、景観や近代化遺産など既存の地域資源を活用する活性化策を検討していった。

貴重な史跡や遺構、ぶどう園やワイナリーなどの「点」を散策ルートという「線」でつなぎ、さまざまな交流活動を通じて、地域全体、すなわち「面」への展開を図っていくという構想を立てた。その過程で知ったのが英国発祥の「フットパス」の存在であった。

先進事例である東京都町田市の多摩丘陵フットパスをメンバーで視察、自然や歴史、文化など地域を丸ごと体感できる事例に触れ、「これは理屈抜きにおもしろい」と、その概念や手法を取り入れていった。「考えているだけでは始まらない」と、平成18年12月には同プロジェクトが主体となって「お試し歩き会」と称してガイドツアーを開催、市内外から60人ほどが参加した。慣れないガイドの案内でも、参加者は熱心に聴いてくれる。昼食はメンバー手作りの郷土料理「ほうとう」。ぶどうやワインも添えて、参加した皆さんは喜んでくれた。スタッフも「これはいける」と手ごたえを感じた。

フットパスは成熟化時代の観光スタイルと住民の生涯学習の機能を併せ持つ、新たな地域づくりのための有効な手立てではないかと直感した。

朝市会場を起点にガイドツアー

以来、毎年1回、開拓した新しいコースを使って「ウエルカムツアー」と銘打ち、参加費1000円で昼食付きのガイドツアーを開催している。



朝市での買物風景。毎月第1日曜日に開かれる「かつめま朝市」は、200を超える出店で賑わう



フットパスのルート上に開店した「縁側カフェ」。農家の縁側や座敷に座って味わうお茶や漬物はまた格別



大日影トンネル遊歩道。JR中央線の廃線トンネルを活用した約1.4kmの遊歩道は、レンガやレールなどがそのまま残る

平成20年からは自主的な団体（勝沼フットパスの会）として活動を始めた。現在会員は20代から60代まで27人。男女比も半々で勤め人や農家、自営業など職業もさまざま。趣旨に賛同して集まった個性豊かなグループである。

「勝沼フットパスの会」の活動は毎月第1日曜日に開かれる「かつめま朝市」（200以上の出店があるフリーマーケット）の会場を起点に月替わりで3コースのガイドツアー（参加費300円）を実施するほか、前述のウェルカムツアーを年1回開くのが主な内容である。

特に新規のコース開拓には、事前歩きを何回も重ねるが、これが意外とおもしろく、新発見、再発見の連続で楽しみながら勉強になる。会員の中には郷土史の専門家もいて、彼の解説を聴きながら歩くのである。こういう人材がいるとフットパスの中身が濃くなっていく。重要な存在である。

またウェルカムツアーでは食事内容も重要な要素なので「料理のことなら任せて」という女性メンバーの存在も頼もしい。月に一度の例会も集まりがよく、活発に意見交換をしている。

◆「ワインの歴史コース」や「勝沼宿コース」などを設定

勝沼フットパスのコース設定は、現在10本ほどだが、このうち案内サインのあるコースは重複箇所を含めて6本ほどで、2kmから10kmくらいまで距離はまちまちである。

明治期のワインセラーや醸造所を巡る「ワインの歴史コース」、甲州街道の面影を残す「勝沼宿コース」、農村部には珍しい「寺町コース」のほか、JR中央線の勝沼ぶどう郷駅を基点に、長さ1.4kmの廃線トンネルを活用した遊歩道やトンネルワインカーヴ（貯蔵庫）などを巡る「鉄道遺産コース」などである。

ス」などである。

これらのコースは、サインや歩道などインフラ整備は行政が行い、ガイドツアーやイベントなどソフト事業は民間が担っている。いわば、公設民営のフットパスである。

どのコースも、ぶどうとワインの里・勝沼ならではのコースだと思う。イギリスや北海道などのように雄大な自然の中を歩くのが、元来のフットパスのイメージだとすると、勝沼フットパスはかなり異なるが、これはこれで個性的なフットパスではないかと考えている。

「ワインは風土文化を味わうもの」と言われるが、この言葉がそのまま当てはまるのが「勝沼フットパス」ではないかと勝手に思っている。サイン標識の整備やガイドの充実、景観保全や地域振興への更なる貢献など、フットパスを取り巻く課題は多いが、急がず慌てず、楽しみながら、文字通り、一歩一歩着実に歩んでいきたいと考えている。

ロングトレイルが新たな観光資源に ―地域の歴史・文化の継承も―



NPO法人信越トレイルクラブ 事務局長

● 木村 宏

自然資源を生かす

NPO法人信越トレイルクラブ事務局のある飯山市は、長野県の北部に位置する人口約2万3000人のまちです。古くから山国信州と日本海を結ぶ交通の要所としての役割を担ってきました。戦国時代には、上杉謙信の川中島出陣の際の前線基地として飯山城が築かれ、城下町として栄えました。しかし、高度経済成長期に、産業の立地する条件をもたなかったこと、さらに豪雪地帯であるというハンディもあり経済成長が停滞し、若年層を中心として人口が流出しました。

一方で、多くの自然資源に恵まれ、唱歌「朧月夜」にも歌われた菜の花畑など、日本の原風景ともいえる風情あふれる景色を今も残しています。この自然資源を生かした観光商品をつくってお客様をおもてなししようという取り組みが盛んになってきていますが、その一翼を信越トレイルが担っています。

国内初の本格的ロングトレイル

信越トレイルは長野・新潟の県境に位置する標高1000メートル前後の関田山脈のほぼ尾根上に延びる全長80キロ（斑尾山―天水山間）におよぶ国内初の本格的ロングトレイルです。これまでの山頂を目指す登山スタイルとは違い、地域の資源や人に触れ、自然を愛でながらのんびり歩くトレッキングスタイルを提唱しています。

関田山脈は、人間と自然が共存した豊かな森林環境を有する里山でした。しかし、時代の変化とともに、地元住民が山へ入る機会はほとんどなくなり、里山がもたらす機能に対する認識は薄れ、山は荒廃しました。

また、かつては信濃と越後を結ぶ交通の要所として、16もの峠道を有したこの山脈は、地域の交流を通して様々な歴史や文化が育まれ、この地域特有の生活が営まれていましたが、経済や交通の発展によりそれらの峠道が使用されることはなく



信越トレイルを象徴するブナの森の歩道

なり、その存在自体も忘れ去られようとしていました。

そこで、トレッキングルートを整備し、古道を復元することで人々を再び山へ誘うきっかけをつくり、新たな観光資源として地域に人々が集い、埋もれつつある地域の宝物に再び地域住民が目を向け、関心や誇りを持つことが、それを次世代に引き継ぐきっかけにもなると考えました。

県・市町村を越えた連携

平成12年度の国土交通省「北陸地域の地域づくり戦略」事業に基づく活動の一環として、長野・新潟両県の有識者で構成する信越トレッキング委員会（設立当初は「信越エキゾチックトレッキング委員会」）が設立されました。さらに平成13年度には地元関係者を中心に「関田山脈歩くルート設置推進連絡会」が発足し、新潟・長野の県境にトレッキングルートを整備することによる地域連携や活性化に関する調査、研究が行われました。

3年間の調査、研究の実績としてトレッキングルート設定が具体化し、平成15年度にはNPO法



ボランティアによるトレイル整備活動の様子



ガイド講習会の様子

人信越トレイルクラブが発足しました。
トレッキングルートの整備は長野と新潟の17市町村（合併で現在は9市町村）にまたがる広域的な活動ですが、関係者による連絡会が設置され、両県の自治体、関係団体が連携し、トレイルの整備、PR活動、イベントの開催、情報共有などを行っています。

◆ ◆ ◆ ボランティアが活躍、 古道を人力で復元

古道や国有林の管理道を人力で復元し、平成20年9月に斑尾山〜天水山間の全線が開通しました。開通に至るまでには、地域住民を中心とし、NPO団体、企業、行政機関が連携し、2000名を超える数多くのボランティアの協力がありました。また、全線を20区に分け、周辺自治体及び関係団体がそれぞれ整備区間を担当し、地域のボランティアの方々の手による持続的な整備が行われています。

トレイルが整備されたことにより、地域の資源が再評価され新潟県上越市内では、2地区で地元住民の手により古道が復元されました。また、同県十日町市では自治体と住民が共同した遊歩道整備が行われ、長野県飯山市では地域の自然環境を守りながら活用していく3つの組織（斑尾トレッキング委員会、天然記念物「黒岩山」保全協議会、戸狩トレイルクラブ）が発足しました。

◆ ◆ ◆ 新たな観光資源として

信越トレイルクラブでは、信越トレイルの理念に賛同し、トレイル整備に参加し、また利用者に情報提供を行う宿を加盟宿として登録していただいています。

トレイルが通る斑尾高原スキー場や戸狩温泉スキー場などのペンションや民宿では、トレッキングの宿として利用者へPRするほか、宿泊と合わせたトレッキングツアーを企画するなど、スキー

人口の減少が続く中、新たな需要につなげる取り組みとして、またグリーンシーズンの新たな観光資源として信越トレイルを活用していただいています。

また、利用者がスムーズに最寄駅からトレッキングの起点へ移動でき、また終点から最寄駅まで移動できるよう、タク

シー等の交通事業者と連携。さらに車の利用者向けには、トレッキングが終了する地点まで車を回送するサービスを運転代行業者と構築し、事業者にとっても新たな事業となっています。

このほか信越トレイル周辺地域の自然や歴史、文化に詳しい登録ガイドが40名ほど活動しています。地元の長野、新潟に住みながら、誇りを持っておもてなしし、平成25年度は延べ178人のガイドを派遣、延べ1800人余りをご案内しています。

利用者は年々増加しており、長野、新潟のみならず、関東、中部圏からの旅行会社によるトレッキングツアーが開催され、平成25年度には年間3万6000人（推計）の利用者がありました。

平成27年春に北陸新幹線が金沢まで開通し、信越トレイルがある関田山脈を挟み、飯山駅と上越妙高駅が開業します。関東圏はもとより、北陸圏、成田・羽田空港からのアクセスも良くなり、国内外から多くのお客様の来訪を期待しています。

◆ ◆ ◆ ルート延伸を視野に

信越トレイルには更なる夢、延伸があります。信越トレイルの構想から運営に至るまでご尽力いただいた、日本を代表するバックパッカーであり、作家でもある故・加藤則芳氏の想いでもあるルート延伸（北は苗場山、南は雨飾山まで）を実現すべく、関係省庁、自治体の皆様と協議し、また信越トレイルを支えて下さるボランティアの皆様の協力添えを頂きたいと思っています。

「ため池」を活用し、散策ルートを設定 —マップも好評、増刷へ—



稲美町経済環境部産業課長

● 本岡利章

町内に88力所、ため池のまち

稲美町は、兵庫県南東部に位置し、周辺を明石市、神戸市、加古川市、三木市に囲まれた地理的条件から阪神地域のベッドタウンとして発展してきました。面積は34・96平方キロで、人口は約3万2000人です。

いなみ野台地と呼ばれている段丘台地にあり、大きな河川がありません。気象は、典型的な瀬戸内気候で、年間降水量も少ない地域であり、昔から農業用水の便が極端に悪く、先人は水を確保するため、たくさんのため池を造り、農業用水として利用してきました。そのため、現在では、満水時の水張り面積49鈔で県下最大の加古大池や、県下で最も古く築造された天満大池など、町内に大小88力所のため池が存在し、池の総面積は町の面積の約10・7%を占めるといいため池のまちです。

いなみ野ため池ミュージアム

稲美町と近隣の加古川市、明石市、高砂市、播磨町で構成する東播磨地域では、平成14年に兵庫県的主导で、豊富なため池や水路を地域の大切な資源として次世代に引き継いでいこうと、地域のため池と水路を屋根のない博物館の展示物と見立てた「いなみ野ため池ミュージアム構想」がスタートしました。

稲美町では、このミュージアム構想に関連するハード整備事業として、平成15年度から国庫補助事業の田園空間整備事業に取り組み、ため池周辺で人が憩えるように、そしてまた住民の健康増進のために、ため池の堤防に遊歩道や親水護岸、東屋を整備するとともに、ため池看板等を設置し、平成20年度に同事業を完了しました。

散策ルートマップを作成

この田園空間整備事業の集大成として、稲美町では、地域の方々が長年にわたり維持管理してきたため池を中心とした水利用の素晴らしさを、町内外の人々が自然や文化を通して感じることで、きるように散策ルートマップの作成を計画しました。

この「いなみ野フットパス」のルートマップづくりは、明石工業高等専門学校の工藤和美先生にお願いし、マップのデザイン、散策ルートの設定、景観等ルートのみどころの掘り起こし、各ルートに合ったイメージキャラクターの設定など楽しいマップを作っていました。また、町でも先生の設定したルートを実際に3人の職員で自転車で回り、危険なところの有無や所要時間等を確認



兵庫県内最大のため池「加古大池」(点線内の部分)



道標キャラクターの一つ「いなびょん」

し、平成20年6月に1万5000部を印刷、うち約1万部を町内全戸に配布しました。

いなみ野フットパス、5ルートで構成

稲美町では、町の東端にある練部屋分水所から各地域に「流（りゅう）」と呼ばれる農業用水路により、各ため池に水が配られるというシステムになっています。フットパスルートは、この「流」に沿って、「加古の道」、「入ヶ池郷の道」、「印南の道」、「天満の道」とこれらをつなぐ「愛宕の道」の計5ルートで構成されています。また各ルートには、それぞれかわいいイメージキャラクターをつけています。



まちづくりウォーキングの様子

ルートマップは横80センチ、縦60センチで、その表には、これら5ルートを組み合わせた7つのコースを設定し、それぞれの見どころを示しています。また、ルートごとに稲美町の歴史や自然、天満大池のまつりや重要な農業用施設等を写真で紹介しています。

マップの裏面では、町の地図をベースに各ルートのほか、分岐点にはイメージキャラクターの表示（実際にプレートを道路に埋め込んでいます）、ため池や石碑やほこら、ため池看板、昔からの農業用水路である「流」を表示しています。

なお、スタート地点は駐車場等がある加古大池管理棟としています。

ルートマップ、増刷へ

稲美町では、このマップをもとに5つの小学校区で年1回まちづくりウォーキングが行われています。また、お隣の加古川市の一大イベントであるツーデーマーチのコースにもなっています。

平成20年に作成したマップは、町内全戸に配布した後の残り（5000部）も町内外からの問い合わせでほぼ配布済みで、フットパスに対する関心の高さがうかがえます。このため町では来年度、マップを増刷する予定です。

自転車で「ため池周遊」を

「いなみ野フットパス」の利用に当たっては、ルートを歩かれるのはもちろんいいのですが、自転車でも回ることもお勧めします。

将来的には、例えば加古大池に貸し自転車用の施設を設置し、加古大池を管理している指定管理者にその運営をお願いして、町内をサイクリングしていただければと考えています。また、各ため池にスタンブ台等を設置して、現在町内のため池数が88カ所なので、四国の巡礼になぞらえて、全部回ったら何か記念品をわたすなどのイベントも面白いのではと考えています。

このマップで、みなさんの健康増進はもちろんのこと、稲美町の水に対する先人の苦労や、農耕地帯のどかな風景を楽しみながら、できるだけ多くの皆さんに活用していただき、本町をPRできれば幸いです。

フットパスを地域おこしのツールに
—400年前思い、ウオーキング大会—



鳥取市鹿野往来交流館「童里夢」副館長 ● 平尾和彦

行政と住民が協力してまちづくり

鳥取市鹿野町は、鳥取市の西部に位置する小さな城下町です。安土桃山時代から江戸時代にかけて、亀井茲矩（このり）公が城主として37年間統治、街並みは今も当時の面影を残し、「鹿野祭り」は400年の伝統を誇ります。その「鹿野祭りの似合う街」をコンセプトとして行政、住民が協力してまちづくりを行ってきました。

行政を中心に平成6年度から街並み環境整備事業に取り組み、街並み整備ガイドラインを策定。平成8年には各町内で街づくり協定が策定され、公的空間である道路、水路の縁石、石橋、石行燈などの整備を開始しました。地域住民も祭りに似合う住宅改修や屋外環境の整備を行ってきました。

平成13年10月には地域住民が主体となり、NP
O法人の「いんしゅう鹿野まちづくり協議会」を
設立。空き家を活用した物販施設「鹿野ゆめ本陣」

の整備などのほか、街並みや地域文化を活かした活動を継続しています。

また、収益事業を営みながら、儲けたお金を地域づくりに還元する公益的機能を併せ持った第三セクターとして平成16年10月に「株式会社ふるさと鹿野」が設立されました。

「株式会社ふるさと鹿野」は交流人口の拡大につながる町外や県外の人との仕掛けづくり、一方で、「NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会」は町内のまちづくりといった、ある程度のみ分けがなされています。

まちづくりで様々な事業

「いんしゅう鹿野まちづくり協議会」が中心となつて、平成16年に民家の玄関に藍染め暖簾をかける取り組みや、陶器の醤油瓶を半割にして山野草を植え付ける取り組みを行いました。平成18年には昔の火鉢等を活用して軒下でメダかを飼う事業を進め、平成20年には鹿野町内に残る屋号を

かそうと、昔の屋号を書いた瓦を焼き設置しました。

そして、行政が中心となり、鳥取大学で研究された約130種類の世界の蓮を譲り受け、鹿野町内の住民に株分けし、各戸の軒下で育てていただいています。

一方、平成22年4月には「株式会社ふるさと鹿野」が鳥取市西部地域の観光交流拠点である「鳥取市鹿野往来交流館（童里夢）」を運営することになりました。交流館では、城下町の各家々の軒下に地域の方が作成した川柳を短冊に書き、その短冊を付けた風鈴を設置いただくなど、街並みの演出に関する事業を行っています。また、鹿野町特産でもある「鹿野そば」の花を感じていただく「城下町鹿野そばの花ウォーク」を開催するなど、様々な地域づくり事業を展開しています。

このように、鳥取市に編入（平成16年11月）される以前から住民主体で地域づくりを進めてきた鹿野町ですが、それらの活動は、地域の方々の長年にわたる自然への働きかけや、風土に根ざした伝統的なスタイル、土地への愛着などの結果として生み出され、維持・管理・発展してきたものだと感じています。

400年前を思い、ウォーキング大会

平成24年10月、フットパス協会の会員でもある鳥取市鹿野往来交流館（童里夢）が主体となつて「第1回鹿野往来亀井ウォーク」を開催しました。

400年ほど前、鹿野町を統治していた亀井茲



第1回鹿野往來亀井ウォーク。空き家をギャラリーやカフェに改装した「しかの心」の前を通過する参加者



小川と格子戸に情緒を感じる城下町鹿野を歩く参加者



のどかな風景を感じながら歩く様子

はなく、地域の風土や歴史・文化を感じながら歩くプロセスこそが観光振興や地域振興に繋がると理解しています。

今後もフットパスを一つの地域おこしのツールとして考え、鹿野町のため、地域のために尽力したいと思えます。

矩公は山陰地方では珍しい朱印船貿易を行った大名です。このウォーキング大会は、『亀井公が鹿野城下から積出港（鳥取市青谷町）まで朱印船貿易のために実際に通ったであろうルート』を歩く内容としました。当時、亀井公が何を考え、何を残し、鹿野町（西因幡地域）をどのように変えていこうと思っていたのか。こうしたことに思いをはせながら鹿野の町を歩く大会です。

コースは全長約14^{キロ}。このうち半分の7^{キロ}を歩くハーフコースも設定しました。ウォーキング大会には約180人が参加しましたが、その感想の一部を幾つか紹介します。

「城跡公園のお堀には桜の木が多くあった。桜の花が咲く季節に訪れてみたい」

「城下町は道幅が狭く、L字、T字路のような仕掛けがあり面白い。沿道には蓮の花などが鉢やプランターに植えられていた。また、家々の格子や風車がきれいだった。次回はゆっくり城下町を歩いてみたい」

「大堤池で『うぐい突き』という漁法を用いた行事が行われていた。亀井茲矩公が東南アジアから持ち帰った漁法だそうだが、次回はぜひ『うぐい突き』の行事に参加してみたい」

「山道を抜け、山頂付近から見た日本海がとてもしきれいだ。日本海からとれる魚介類は美味

地域おこしのツールに

しいだろう。この地域では何がとれるのだろう」

このように、大会を通し、鹿野の歴史や文化以外に現在の情景や食・人なども感じていただくことができました。平成25年11月には第2回「鹿野往來亀井ウォーク」を開催、今後も毎年秋にこの大会を開きたいと考えています。

また、このコースとは別に幾つかのフットパスを整備することも検討する方針です。

フットパスとは「昔からあるありのままの風景を楽しむ道」と言われています。そして、単に道

地域を元気にする〰魔法〰・美里フットパス

―「歩かせていただく」気持ち大切に―



美里フットパス協会運営委員長 ● 井澤るり子

歩かせていただくフットパス

美里町は熊本県の中心に位置している典型的な「中山間地域」。九州脊梁山地に源を発する緑川が東西に流れ、北側はなだらかな丘陵地帯、南側は急峻な山が幾重にも重なっている。谷川には江戸時代後期に架けられた石橋が36基点在し、山肌を縫うように掘られた用水路が走り、ため池も多く棚田を潤している。

農村や里山や自然の景観など素晴らしい資源が数多く保存されているが、観光資源である石橋群も、国道沿いの有名な石橋を見て次の目的地へ行くというように滞在時間は短く、地理的にみても「通過型」となっていた。

人口は約1万3000人で、減少に歯止めはかからない。そこで「町をどうにかしたい」という仲間が集まった。そのリーダーの美里NPOホルディングス理事長・濱田孝正氏が2010年秋、「フットパス」を紹介した。

英国のフットパスは「歩く権利の獲得」の歴史だが、権利を振りかざして歩いてもらっては困ると、何となく共感できない部分があった。

『フットパスとは、森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩く小道』と定義づけられる。この「ありのままの風景」が維持されてきたのは、地域の人たちが生業を続けてきた結果である。地域の人たちが守ってきた集落の中を「歩かせていただくのがフットパス」なのだ。私たちはそのように「共通理解」をした。

「フットパス」は耳新しい言葉だが、使っていくと定着すると信じて、2011年春、まず、歩くことから始めた。「美里式」フットパスのスタートだった。町をどうにかしたいと始めたフットパスの活動だが、同じ美里町に住んでいても、コースを作らせてもらうよそ者だという自覚を常に忘れないようにした。

コース作りで協力求める

私たちはコースを作るために、集落の中に入っ
て出会う人ごとに思いを伝えた。

「美里町は人口が減るばかり。まずは、交流人口を増やしたい。美里町の良さを知ってもらうためには滞在時間を長くする必要があり、それには、フットパスで歩いてもらうのが一番。だからと言って、どこでも歩いてもらうのは困るでしょう。歩いてほしい道を教えて」と地域の人達に訴えた。同時に、地域の代表者会議に参加して、フットパスの取り組みへの協力を依頼し、町内全戸にチラシを配布し、フットパスコース作りへの理解を求めた。

町内を歩くことによって見えてきたのは素晴らしい風景だった。この風景が引き立つコースを作らなければという責任も感じた。コースは、協力的な地域から順次整備していった。

こうした中で、昔の古い道や歴史の話を積極的に話す人や、案内してくれる人も現れた。「何かしたいと思っていた。協力するので、コースを作ってください」。フットパスが支持され広がっていくという大きな手応えを感じた。

今までと同じことを続けるのは、何もしないことと同じ。田舎だ、不便だ、過疎だと言われてきた所が、フットパスウォーキングの人たちによって「素晴らしい所だ」と口々に驚嘆されると、地元の人々も嬉しくないはずがない。地域やそこで生活している人々が認められた瞬間だった。

地域を元気にする魔法

安全で楽しく歩けるコースを作ること、魅力ある地図を作ることを目標に、妥協せずに歩き、マップの改定を続けた。フットパスが町内に知られ、歩いていると、「フットパスですか？」と声をかけられることも多くなった。

地域のありのままを生かす地域活性化の取り組みとして浸透し、熊本県内や九州各地から「美里で研修したい」との問い合わせが増えてきた。2013年4月1日に「美里フットパス協会」を設立。美里フットパスの推進、研修の受け入れ、イベントの開催、ガイドの養成など、フットパスに関する全ての事業を行っている。

美里町には現在、フットパスが10コース（長さは約4^{キロ}から約9^{キロ}）があるが、今年度中には5コースを加えるほか、2泊3日で町内を横断する3つのロングコース（約10^{キロ}）も開設する。「美里式フッ



岩野用水コース。地域のご婦人が「フットパスですか」「どこから来ましたか」と笑顔で声をかけてくる



白石野里山コース。地域の集会所で手作り料理のお昼ご飯。自宅で作った野菜や漬物、乾物を使って作った料理を持ち寄る



全国フットパスサミットin美里。パネルディスカッションの様子

トパス」はマップを作り、コースを整備して終わりではない。ありのままの風景の維持は、今まで通り地域の人達が生業の中で続ける。そのサポート（マップの販売・イベントの開催・ガイドの手配・研修会等の開催）を継続するのが美里フットパス協会の仕事だ。この良好な関係の維持は、フットパスを続けていく上で重要である。各地で続けられてきた、祭りや行事に合わせたフットパスイベントも開催し、協力体制を強化している。

一方、昨年11月8日・9日に「全国フットパスサミット in 美里」——地域を元気にする魔法——フットパスはまちをどう変えるか——を開催した。全国大会は町始まって以来の大きなイベントだった。和牛生産組合、婦人会、スポーツクラブなど多くの団体が協力態勢で臨み、「美里式」を合言葉に「出来ることでおもてなし」をした。それが、参加者と迎える美里町の住民が直接交流できる場となり、大盛況のうちに終えることができた。

広がるフットパス、九州でネットワーク化も

人々が生業の中で守ってきた風景は美里町に限ったことではない。一つの町では限られるコースメニュー。たくさんコースの中から歩きたいコースを選んで時間をかけてフットパスウォーキングができるなら、それだけ元気になる地域が増える。

これまでの活動では大きな障害はない。しかし、フットパスの特性を考えると、地域の理解と協力、さらに地元自治体との一体的な推進は極めて重要と言える。

人々が生活する場にコースが出来るので、地域が歩く人を快く受け入れ、おもてなしをする気持ちが必要だ。そのおもてなしは「笑顔と声かけ」。丁寧に説明を重ね、地域が「歩く人、大歓迎！」となるように進めていきたい。

また、利用者にも「歩かせていただく」という気持ちを持つていただくよう啓発することも欠かせない。自治体との連携も不可欠で、それぞれが持つ強みを生かすことが最終的な地域の強さに繋がっていく。英国のフットパスは、地域経済にも大きく貢献している。余暇を田舎のフットパスで過ごすという習慣ができれば、地域経済の活性化にもつながる。

現在、九州でのネットワークを構築しようと、企業や地域、様々なセクターと連携しながら、九州中に美里式フットパスを広げようと動き始めた。「フットパスネットワーク九州（FNQ）」の設立に向け準備を進めている。

日本におけるフットパスのとりくみ

日本フットパス協会 理事 ● 神谷由紀子

1、注目されている日本のフットパス

フットパス (footpath) とは、イギリスを発祥とする「森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと」【Foot】ができる小径（こみち）【Path】のことであり、ひいてはこのみちを歩くことの総称である。（「日本フットパス協会」）

もともとはイギリスが発祥地である。イギリスではどのまちでも観光案内所でフットパスを歩きたいと言うとマップを出してくれ、市民は歩くことを楽しんでいる。

最近日本でもフットパスへの関心が年々高まっている。しかし、日本のフットパスはイギリスのフットパスを模倣したものではない。日本には日本のフットパスが育っている。

日本のフットパスは、健康や環境への貢献は言うに及ばず、観光誘客やまちづくりの画期的な手法として、全国の自治体や市民から注目を集めて

いる。「日本フットパス協会」に寄せられる各地からの問い合わせや会員申し込みはここ1年で急増しており、北海道や九州では広域なフットパスのネットワークが形成されつつある。

2、日本のフットパスとは何か

日本では今から20年ほど前、自分の地域を歩いて新たな発見を楽しむ活動が自然発生的に各地で始まった。北海道、山形県長井市、東京都町田市、山梨県甲州市などでほぼ同時期に従来の観光とは少々違ったイベントが催されるようになった。名所旧跡などではない、いつも車で通り過ぎていたような周辺のみちを歩いてみると、幼少期に見たような原風景が意外に多く残っていることに気づき、改めてその美しさに胸を打たれたのである。

このような自分の地域を歩くということは当時とても新鮮で多くの人を惹きつけた。そしてこの活動はイギリスのフットパスに似ているということでフットパスと呼ばれるようになった。イギリ

スのフットパスは産業革命の後に労働者たちが、貴族に囲い込まれてしまった国土を「せめて歩かせてほしい」と運動をおこし、その結果勝ち得た「歩く権利」であった。人間性の回復を求めた運動の一つがフットパスであったのである。日本でもフットパスはバブル経済が崩壊した1990年代後半に現れた脱工業化の社会現象であったように思う。フットパスはそれまで経済一辺倒であった日本人の価値観が大きく変動した象徴と言えるであろう。

これに加えて日本のフットパスの大きな特長は、歩く人を楽しくさせるだけでなく地元の人々をも地域の魅力に目覚めさせ、両者を一緒にまちづくりに引き込んだことにある。外部の人間に地元の景観の美しさ、伝統食の美味さを褒められて、地元の人々の間に地域に対する誇りと愛情が生まれ、地域のファンとなった都市住民や若い人たちと共に自分たちから進んでまちづくりを始めたのだ。

3、フットパスに内在するまちづくりの力

このようにフットパスが日本で関心と呼んでいる一つの大きな理由は、それがそのまままちづくりに発展する大きな力を持っていることにある。フットパスは一見するとウォークイベントにすぎないようにも思われがちだが、フットパスを導入した地域では画期的な活性化が報告されている。「何も観光資源のなかった地域が観光のまちになった」「過疎地域に若い人や外部のファンが訪れて新しいまちづくりが始まった」「観光資源は



フットパスを歩く人たち



フットパスを訪れた人々を農家でもてなす様子

あるが将来が懸念されるまちが新しい資源を得てさらに魅力のあるまちになった」など本誌にある実際の事例集をご覧になっていただきたい。

なぜフットパスにはこれほどまでの効果があるのか。それは、フットパスがまちづくりの基礎である5つの要素において効果を発揮することができるからだと思われる。

第1の要素はまちづくり資源の発見である。フットパスをつくるために皆さんがいいなと思うみちを繋いで歩いていくと自然にそのまちの成り立ちや性格、そして魅力が浮き彫りになる。従来のまちづくりはグルメとかまつりとか歴史とか何か上からテーマを決めてそのまちに当てはめていたように思うが、フットパスは逆にいいみちを繋ぐと不思議なことにそれがそのまちの「売り」になるのである。

第2の要素はファンづくりである。フットパスを歩く楽しみを見つけた人たちは、遠方からでも

足を運ぶ。そしてその地域のファンとなり、リピーターとなり、ついには地域に定住し、まちづくりの担い手となる。

第3の要素は共同体の再生である。フットパスのイベントなどによって地元民が外部住民に協力したり、反対に外部住民が地元の活動に参加したりと、一緒に作業を行う機会が増える。また移住した若い人や都市住民が地元民に農業漁業や地域の風習を習ったりすることもある。これによって地域の共同体は新たな共同体に再生することができる。地域の商店街も客の顔の見える商品やサービスを提供することができるようになり重宝される。

第4の要素はプラットフォームの形成である。フットパスを作る過程では、新住民、旧住民、自治体、商工会議所、外部ファンなど多くの視点を伴って一緒に歩いてみるのが重要であるのだが、この過程で普通ならば出会わないような様々

な属性の人々と、地域の人々の交流が生まれる。これはプラットフォームと呼ばれるが、市民の間に深い絆と共通認識をもたらし、地域への愛情を共有させることができる。合意形成のもとにまちづくりが進む。

第5の要素は経済効果である。フットパスは様々なものを繋ぐこ

とができる。地域に外部の人間を繋ぐ。地域の内部で様々な人材を繋ぐ。そして地域と地域も繋ぐ。ひとつのまちのフットパスを楽しんだ人はまた次のまちのフットパスへとように、地域から地域へと人のフローが経済のフローとなって大きな経済効果をもたらすこともできる。実際フットパス先進国イギリスでは15あるナショナル・トレイル（長いフットパス）から8000億円という経済効果の実績が出ている。日本でも全国にフットパスが普及すれば日本全国を繋ぐ新しいネットワークや経済基盤も再建できるかもしれない。

4、どんなまちでも始められる フットパス

日本のフットパスが関心を集めている第2の理由は、フットパスはどんなまちでもつくることができる点である。大きなまち小さなまちなど自治体の大小や都市部や過疎地には関係ない。

例えば限界集落などの過疎の村には日本の原風景といわれる「里山」など優れた景観が残る地域が多く、伝統的な生活も残っていて、フットパスの観点からすれば資源が豊富にあるということになる。一方、東京などの大都市でも、里山などはないかもしれないが、昔の大名屋敷跡地の緑、戦災から残った路地、レトロな商店街など、まだまだ昔のよすがを残す景観が残っており、素晴らしいフットパスがいくつも発見できる。

一見資源がないように見える地域でもいい感性さえあればフットパスはできる。要は見方を変えたとそのまちならではの魅力が見えてくるのである。

このようにどのようなまちにもフットパスができる。種差海岸は考えている。言い換えればどのようなまちでもフットパスを取り入れていただければまちづくりが進むチャンスがあるということである。

5、東大日本震災復興とフットパス

現在、私のところにも「フットパスの手法を教える」というお電話が前にもましてかかってくるようになった。どの地域も伺ってみるといつも「こんなところにもこんな素晴らしいところが残っていたのか」と感心させられる地域ばかりである。日本とはなんと美しい国なのだろうか。

その中でもとりわけ私が今気にかけているのが被災地である。2012年に環境省の主催で、東日本復興国立公園トレイル、現在の名前を「みちのく潮風トレイル」、を復興のシンボルの一つとしてどのように活かしていくかという公聴会が開催された。

私は国立公園のトレイルにひっかけてそれぞれの関係自治体でフットパスをつくっていただき、このトレイルにいらした方が地元のフットパスをも回って地元を楽しんでいただくことができるようになれば、地元も潤うし、環境省側もトレイルなどの施設整備やトレイルのメンテナンスなどを地元にお任せできるというメリットがあるという意見を申し上げた。そして、2013年5月にはちょうどオープンしたばかりの青森県八戸市の種差海岸コースに、本場イギリスのナショナル・トレイルの専門家であるシーラ・タルボット氏をお連れ

して現地を視察した。

種差海岸はシーラさんもべた褒めだったが、誰がみても一級のコースで、またそれに繋がる八戸のフットパスも大変おもしろいものができそうだった。人的資源も食も揃っていた。ここで復興トレイルとフットパスをコラボしたモデルの第1号ができればいいなと思っていた矢先、八戸のNP法人アクティの町田直子理事長からご依頼があり再度伺って、そのモデル作りに一緒に参加させていただけることとなった。

同理事長が感じる現地の魅力については理事長自身による別稿を掲載させていただくが、この魅力の再発見により現地の取り組みは大変速い展開で育っているようである。また、環境省からは、次にオープンする福島県の相馬市と新地町でもフットパスの話をするようにとのお誘いを受けている。相馬市は八戸よりも震災の被害がひどいという。どの程度お役に立つかわからないが、若い人々が自分のふるさとを見直し再度新しい命を吹き込めるような社会、地域を愛し子供たちに命を繋いでいけるような社会を築いていくお手伝いができると思う。その意味でぜひ東北でフットパスのネットワークが広がり、復興から立ち上がる基盤をつくっていただけたらと思っている。

6、おわりに

2011年3月11日の東日本大地震は日本人の価値観を一変した。「2回目の戦後」といみじくも言われるように、想定外の地震の破壊力は被災地だけでなく、経済効果のみを目標としてきた日

本人の戦後の生き方そのものを変えたように思う。しかしこの混沌とした瓦礫の中から、今私たち日本人にはこれから再建すべき「新しい社会」がおぼろげながら見えてきているのではないだろうかと感じている。

それはどのような社会か。私は、今よりも明るく豊かな社会が期待できると考えている。今までのような高度成長経済はない。中国やほかの新興国にGDPでは負けるかもしれない。しかし低成長でも人間の生きる速度に合った、安定した豊かなまちができるのではないか、また望まれているのではないかと思う。

まさにこれはフットパスがもたらす「新しい社会」の像である。しかもこれは日本に限ったことではなく、イギリスでも近年フットパスがまちづくりに大きな貢献をすることが認識されている。今イギリスでウォーカーズ・アー・ウェルカム・タウンというまちづくりがこの数年で100以上の自治体に伸びる勢いをみせている。一口で言えば、一つのまちをあげて20本ほどのフットパス・コースを数日間にわたって歩くイベントである。その間、そのまちに寝泊りし、レストランで食し、パブでパーティを行い、英国や外国の人々と交流する。このイベントのおかげで、まちの商店街などは年間を通して全商店が活性化するといわれる。私たちも5月に視察を行う予定である。

あなたの住んでおられるまちにも必ずいいフットパスがある。それを見出していただければ、あなたのまちだけにある自然や小さいけれど玉虫色に光る様々な伝統や歴史の遺産に囲まれていることを知り、あなたのまちがどれほど愛すべき貴重



種差海岸

な地域であるかがわかるであろう。
そして日本全国にフットパスが網の目のように

広がることで、日本の底力が上がり真の意味での
強い国家となつてほしいと願うものである。

種差海岸の持つ、魔力に包まれて

特定非営利活動法人ACTY 理事長 ● 町田直子

2013年5月24日に国立公園に指定された青森県八戸市の種差海岸。

この海岸線に続く5・2^{キロ}の遊歩道は以前から整備されており、砂浜、岩場、森林と変化に富んだコースです。6月ごろになると黄色いニッコウキスゲ、秋にはハマギクなど白い花が海辺や斜面に絨毯が敷かれているように咲き乱れます。高山植物と湿地帯に咲く花々を隣り合わせに見ることができ、また650種類以上にもなる植物を鑑賞

することができ
ます。

また、種差海岸は多くの文人・画人に愛されてきました。司馬遼太郎の「どこかの天体から人がきて地球の美しさを教えてやらねば

ならないはめになったとき、一番にこの種差海岸に案内してやろうとおもったりした。『陸奥のみち』(1978年)という言葉は私たち住民を誇らしげな気持ちにしてくれます。東山魁夷の『道』のモデルになった道もこの種差海岸にあります。

ところが、八戸市の種差海岸についてのある調査で首都圏在住者の約9割、東北地方の(青森県を除く)の約7割が、「行ったことはなく、名前も知らない」と回答していました。

大型バスツアーなどで来られた方はおそらく「種差海岸」という言葉は耳にしたかもしれない、でも、それを思い出す糸口となる何かが心の中に残っていないのかもしれない。

当たり前のように生息している植物、あまりにも広く見渡される景色の中に溶け込むように咲いている花々。横道にひっそり佇む神社。そこにまつわる歴史や昔話。そんな全てを包み込むような波の音、風にも音にも気づかないで、うっかり多くのものを見落として先を急いで歩いてしまうのでしょうか。

しかし、私は「この認知度の低かったところこ

そ、言い換えれば種差海岸の魅力に通ずるところなのかもしれない」と感じています。だから今こそ、「種差海岸はすごい！」と注目をあびつつあるのではと感じています。

私はときどき種差海岸にきて海岸線の景観や多様な花々、風、波との対話を楽しんでいます。ここに来て「自然」と対話をしているうちに、希望と勇気が湧いてきます。

種差海岸の魅力は、自然、花、風など一つ一つにもあるのですが、その先の奥深いところに魔力があるように思えてくるのです。だから何度も歩きたくなり、季節ごとの移り変わりや天気の違い、誰とどんな気持ちで歩いたのか。状況が違えば、同じ場所にいってもまた新しいものが見えてきそうです。

ここで暮らしている漁師さんたちやお母さんたちとの会話は楽しく、時間がゆっくり流れていくようです。海の生き物に対しての深い愛情と尊敬を持つている漁師さんたちは、その時期に一番おいしい魚、おいしい食べ方というのを知っています。一緒に話しているうちに、漁港の岸壁で『漁師レストラン』をつくらうということになりました。遊歩道を歩いてちよつと一息。みんなで囲むご飯は笑顔がスパイスとなり格別です。

これからは多くの方にこの地を訪れてもらって、一緒に遊歩道を歩いて一緒に漁師さんのご飯を食べる、そんなツアーでお迎えいたします。この地を訪れる方たちには出来るだけこの場に長くいてもらって、種差海岸の魔力に包まれながらゆっくり対話を楽しんでほしいと願っています。

福井県鯖江市

オープンガバメントを推進 行政情報を活用し、民間がアプリ開発

市民主役のまちづくり

福井県鯖江市では、1990年に「市民憲章」、2003年には「市民活動によるまちづくり推進条例」を制定するなどして市民協働のまちづくりを進めてきました。そして、2010年4月には、市民が市政に主体的に参加し、未来に夢と希望の持てる鯖江の実現に向け、「市民主役条例」を制定し、市民と行政が共に汗を流すという意志と、それを実現するために基本となる事項を市民提案で明文化しました。

具体的な活動は、市が実施している公共的な事業の中から、市民が「新しい公共」の担い手として自ら行った方が良い事業を提案する「提案型市民主役事業」など3つの事業を柱に市民主役のまちづくりを進めています。

オープンガバメントを提案

2010年12月20日、市役所市長室で、WEBの技術の標準化を進めているW3C (World Wide Web Consortium) の日本サイトマネージャで慶應義塾大学の一色正男教授とW3Cに加盟している(株)Deeの福野泰介さんから、ITのまちを目指すための次のステップとして、行政が持つ様々な情報をWEB上に公開し、民間などが二次利用することで新たな公共サービスを創出する、いわゆるオープンガバメントの取り組みについて、ご提案をいただきました。

鯖江市は、市民主役条例を制定して、市民協働のまちづくりを進めており、その前提として、条例第10条で市民と行政との情報共有を規定していたことから、牧野市長は広報誌やホームページに続く新しい情報共



鯖江市政策経営部 情報統括監

● 牧田 泰一

有のあり方として、「やってみよう」と提案を受け入れました。

それから1年、2012年1月に、身近なものから時間や経費をかけずに一歩を踏み出そうと、まず公園のトイレの位置情報(市内41カ所のトイレの位置)から公開しました。この情報を利用して、民間企業が携帯電話の画面で最寄りのトイレの位置などが簡単に分かる検索アプリを開発。市民生活の利便性向上に役立つ

ています。

行政データを公開

鯖江市ではそれまで、市が保有する各種情報を広報誌やホームページなどで一般に公開していましたが、告示やお知らせなどを除いては積極的に公開してきませんでした。

インターネット普及期の1998年に施行された鯖江市情報公開条例でも、データ形式での開示も可能としていますが、開示請求があれば可能な範囲で開示するという受け身の位置づけでした。情報公開条例施行から15年後の現在、パソコンやインターネットの環境整備が大きく進み、自治体にとってもWEBはなくてはならない情報基盤となっています。WEBの進化、新たな情報伝達媒体に、自治体としてどう対応し、



鯖江市が公開したトイレの位置情報を利用したトイレ検索アプリ

住民福祉の向上にどう活用するのか。データシティ鯖江の取り組みは、その方向への第一歩です。

データシティ鯖江の現状

鯖江市では現在、実験的に公園のトイレ情報、避難所、AED（自動体外式除細動器）、地域地図、文化財、消火栓、市バスの位置情報、入札情報など39種類のデータを公開しています。それに伴い、民間企業などがこれらの情報を活用して作成した楽しいアプリケーションは80を超えて

います。

また、オープンデータは近い将来、行政のインフラとして欠かすことができないものになると考えられますので、オープンデータを普及しようとして2013年11月16日には2回目のオープンガバメントサミットを鯖江市で開催しました。

しかし、欧米が目指し、W3Cが進める本格的なオープンデータの世界には、まだまだの状況です。市民福祉の向上や、市民の皆さんが誰でも便利さを感じる水準には至って

ません。市職員のデータ公開に対する理解も、正確性や責任への不安が障害となり進んでいません。

ただ、歩を進めることに少しずつですが、データの有効活用やアプリ、そして、オープンデータの世界について可能性が見えてきています。

データシティ鯖江のこれから

国では、2012年7月、電子行政オープンデータ戦略が決定され、2013年6月には「世界最先端IT国家創造宣言」の閣議決定、G8サミットでの

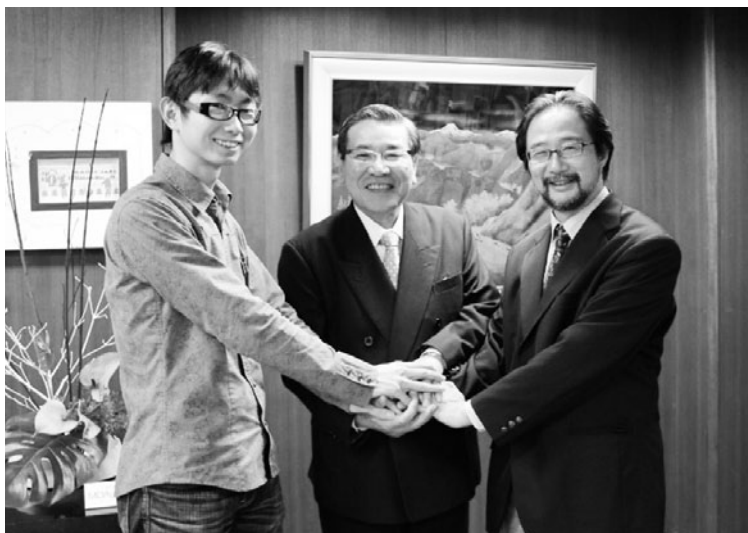
市、敦賀市で具体的な取り組みも始まりました。国や自治体の動きが広がれば、近未来への大きな基盤となります。

これからのデータシティ鯖江は、国や自治体の皆さんと連携を取りながら、行政情報の中から、有効に活用されそうなデータ公開を進めていきます。隠れた有効資産の棚卸です。アイデアソンやアプリコンテスト、IT講座を開催するほか市民、アプリ開発者の皆さんの意見をお聞きしながら、小回りの利いた挑戦で、データの活用、アプリとしての可能性を探っていきます。

そして、データに市境、県境はありませんので、アプリの有効活用のためにも、引き続き近隣の自治体と共同でのデータ作成も進めていきたいと考えています。

さらに、ITは、行政運営、まちづくり、課題解決、そして行政への市民参加に大きな力となりつつあります。小回りの利く自治体ですので、

住民福祉の向上のためにも、横浜市の「育なび.net」と「フューチャーセンター」の取り組み、千葉市のGOV2.0の取り組み、NPOによるCODE for JAPANの取り組みなどを参考に小さい一歩を重ねていきたいと考えています。



右から一色正男慶大教授、牧野百男鯖江市長、福野泰介氏（2010年12月）



オープンガバメントサミット2013の様様。参加したパネラーやコーディネーター

「オープンデータ憲章」の合意、そして、同年12月には、国の各省庁のデータカタログサイト試行版 DATA.GOJPが公開されるなど、オープンデータは大きく動き出しています。

自治体でも、室蘭市、青森県、横手市、会津若松市、流山市、千葉市、横浜市、静岡県、裾野市、金沢市、野々市市、内灘町、福井県、福井市、坂井市、越前

都道府県のアンテナショップ、過去最高の38店に

飲食施設も充実―25年度実態調査―

福井、徳島県が2店目オープン

地域活性化センターはこのほど、都道府県を通じて実施した東京都内

の「自治体アンテナショップ実態調査」（平成25年10月1日現在）の結果を取りまとめた。

店舗数は平成24年度と同じ54店。

前回調査時点の平成24年10月以降1年間で、閉鎖や移転などにより6店（市町6店）が減少する一方、6店（県4店、市町2店）が増えたため同数となった。

同調査が平成20年度にスタートして以来、都道府県の出店数は本年度が最も多く、38店となった（図1参照）。

県のアンテナショップは、増加傾向にあり、福井県と徳島県が2店目を出店するなど新たな動きもあった。26年度以降も、5県（福島、長野、石川、鳥取、岡山）が出店を予定している。

飲食施設が増加、28店に

事業内容では、物産販売が53店（98・1％）で最も多く、次いで観光案内が46店（85・2％）。

最近では飲食施設を設置するショップが多く、28店（51・9％）と半分以上だった（図2参照）。新規出店された6店のうち5店が飲食施設を備えている。「茨城マルシェ」、「三重テラス」は本格的なレストラン、「丘のまち美瑛」、「食の国福井館」では地酒、軽食、スイーツが食べられるイートインを設置している。

売り上げ1億円以上は約半数

今回の調査によると、平成24年度の年間売り上げは、1億円以上3億円未満が12店と最も多く、1億円以上の店舗が25店で全体の46・3％となった。また、3億円以上5億円未満の店は8店で、平成23年度（6店）に比べ2店増加し、販売実績は好調だ（図3参照）。

進むネット活用、外国人への対応に課題も

一方、今回から「アンテナショップのネットの活用」と「外国来訪者への接遇」を調査項目として追加した。

ネットの活用では6項目について導入状況を調べたが、その結果、①ホームページ（44店）②ブログ（12店）③ツイッター（13店）④フェイ

図1 平成20年度～平成25年度出店状況（単位：店）

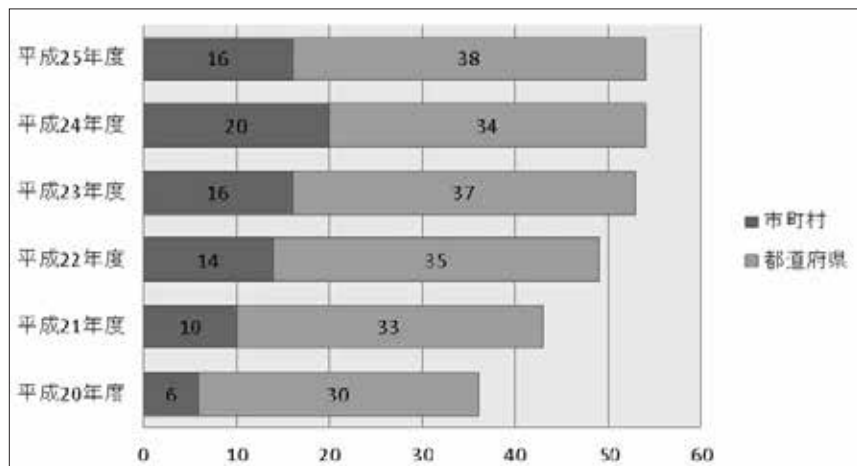


図2 事業内容

事業内容	店数
物産販売	53
飲食施設	28
相談業務	12
観光案内	46
イベント開催	37
展示	21
その他	8

（複数回答）

図3 年間売上額

年間売上	平成24年度	
	店舗数	構成比
3千万円未満	11	20.4%
3千万円以上5千万円未満	2	3.7%
5千万円以上1億円未満	6	11.1%
1億円以上3億円未満	12	22.2%
3億円以上5億円未満	8	14.8%
5億円以上7億円未満	3	5.6%
7億円以上10億円未満	2	3.7%
不明	10	18.5%
合計	54	

スブック(22店)⑤ネットショップ(15店)⑥メルマガ(10店)との回答であった。特に福井県の「ふくい南青山291」と「食の国福井館」は、6項目すべてを導入していた。

外国人観光客などへの接遇については、①外国語パンフレットの設置(2店)、②ホームページの多言語化(4店)、③レストランメニューの多言語対応(2店)、④語学ができる

スタッフの常駐(8店)との回答で、今後に課題を残している。
なお、今回の調査結果については、当センターのホームページ「地域づくり百科」のアンテナショップコーナー

ナーで公開しているので参考にされたい。

地域づくり情報課

● 畠田千鶴

北海道美瑛町

東京・有楽町に町単独で出店

「丘のまち美瑛」、情報発信を強化

北海道美瑛町は、平成25年9月、JR有楽町駅前の東京交通会館内にアンテナショップ「丘のまち美瑛」をオープンさせた。

店内に入ると、雄大な十勝岳連峰とその裾野に広がる広大な麦畑、じゃがいも畑など美瑛町の四季折々の大型パノラマ写真が来館者を出迎えてくれる。物販ゾーンには地元以外では入手できない農産物や加工品が展示、販売され、イートインコーナーでは地元の食材を使った野菜スープやソフトクリームなどを賞味

することができ、人気は、美瑛産の小麦粉や小豆、砂糖を使った「美瑛あんぱん」で、1日限定40個が毎日完売する。

有楽町・銀座周辺には、現在約20

店の自治体アンテナショップが集中し、加えて地域の特産品を扱う民間のショップも数多く出店している激戦区である。家賃などの経費面から都道府県でも出店や運営が難しい立地だが、美瑛町が町単独で出店に踏み切った狙いは、美瑛ブランドの確立や情報発信の充実だ。

美瑛町の魅力に惹かれて町内に牧場を持った東京の人気ベーカーリーカフェからの働きかけが契機となったという。出店に当たり店舗探し等のバックアップのほか、アイスクリームマシなど機材の設置、イートインのメニュー設定、スタッフ派遣など運営面で様々な協力を得ている。



「丘のまち美瑛」の様子



ショップに展示された美瑛町の特産品

一方、地元でも町、JA、商工会、観光協会で組織する運営委員会を立ち上げ、アンテナショップを盛り上げようと積極的に動いている。美瑛

町東京事務所長の観音太郎氏は「まだ、ランニングコストがカバーできていないので、ゆくゆくは改善したい」と意欲的だ。
(編集部)

【ショップデータ】

住所 東京都千代田区有楽町2-10

1、東京交通会館地下1階

電話 03-6269-9747

移住者のネットワーク化を推進

～新旧住民の交流促進にも重点～

千葉県木更津市企画部情報政策課 副主幹

● 伊藤浩之

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・交流による地域活性化支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。今回は平成24年度に同事業を活用した千葉県木更津市の取り組みを同市情報政策課副主幹の伊藤浩之氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

木更津市の概要

千葉県木更津市は昭和17年に当時の1町3村が合併して県下で6番目に市制をスタートし、平成24年11月に市制施行70周年を迎えました。

房総半島の中西部に位置し、東京湾に面し、古くからみなとまちとして発展してきました。江戸時代には幕府から東京湾での海上輸送の特権を与えられて、木更津は江戸と結ぶ物資の集散地として栄え、市内には神社仏閣、江戸文化、レトロ建築など、みなとまちの歴史を感じさせる

街並みが残っています。

内陸部の緑豊かな上総丘陵には、国際水準の研究開発機能の集積を図るサイエンスパークとして「かずさアカデミアパーク」が整備され、バイオ産業をはじめ、エレクトロニクス、新エネルギーなど多様な分野の研究施設や各種製造工場などの立地が進んでいます。

また、市と対岸の神奈川県川崎市とを15分で結ぶ東京湾アクアラインが平成9年12月に開通し、首都圏への通勤や通学の交通アクセスが向上しました。東京湾アクアラインのた

もとは、東京湾に唯一残る自然干潟である盤洲干潟(ばんずひがた)が広がり、海苔やあさりなどの浅海養殖栽培漁業が行われています。特に海苔は全国有数の産地で、江戸前海苔の産地として知られています。

東京湾アクアラインの着岸地周辺は、千葉県の新たな玄関口として土地地区画整理事業による整備が進み、大型商業施設の開業などによって多くの人でにぎわい、地域経済が活性化しています。

定住促進策などで人口増加

市の人口はほぼ横ばいで推移してきましたが、平成17年から3年間実施した定住促進のための持ち家奨励制度、東京湾アクアラインを通る高速バスの充実による首都圏への通勤通学の利便性向上や、首都圏の主な都市と比較して安価で広い住宅地を提

供してきたことなどもあり、平成18年ごろから人口増加に転じました。

このような中、平成21年8月から千葉県が東京湾アクアラインの通行料金を引き下げる社会実験を開始しました。市ではこれを契機に産学官の連携により開設した地域ポータルサイト「木更C O N (きさこん)」(<http://www.kisacon.jp/>)による生活、子育てなどの暮らしに関する情報発信や、東京湾アクアラインの中間にある「海ほたるパーキングエリア」に設置した電子看板「きさらぶ観光コンシェルジュ」による食・イベント・見どころといった市の観光情報の発信を行ってきました。また、集客施設での農産物などの販売やパンフレット配布などにより、定住へ向け地域の魅力を発信してきました。

地域コミュニティの活性化が課題に

これらの取り組みの成果もあり、平成23年11月には人口が13万人を突破しましたが、人口増加は新興住宅地に集中し、農漁村や旧市街地では人口減少と高齢化が進んでいます。また、新興住宅地では地域コミュニティの情報や活動が見えにくく、移住者が地域コミュニティへ参加するきっかけが減少しています。そこで、地域活性化センターの「移



ブルーベリーを使ったお菓子づくりの様子



干潟で楽しむ住民



新旧住民による郷土料理を通じた体験事業

住・交流による地域活性化支援事業」助成金を活用して、移住者のネットワーク化や新旧住民の交流促進による地域コミュニティの活性化を目指して、「移住者のネットワーク化・交流促進事業」を実施しました。

事業内容と成果

この事業では、公民館を地域の交流拠点として、また、公民館のサークル活動や地域内の豊かな自然や歴史などを地域資産と捉えました。そして、これらの地域資産に係る情報を可視化し、豊かにすることで、住みよく、暮らしやすい木更津の魅力として発信することとしました。

そのため、地域の情報を集約・発信する機能を持つ「木更C○N（きさこん）」と公民館を活用して、新旧住民の交流を促進すると同時に、木更津の魅力を可視化する仕組みづくりを進めました。

また、事業を効率的に推進するため、有識者や移住者、サークル活動に参加している市民などで構成する地域情報化推進組織「木更津市地域ICT推進会議」（委員長・瓦井秀和城西国際大学メディア学部教授）を事業のマネジメント担当としました。事業は以下のような3本柱で構成されています。

① 移住者のネットワーク化・新旧住民の交流事業

新たな移住者を対象にしたインタビューや地域の名所を巡るまち歩き、貴重な自然が残る干潟の生物観察を通じた交流会を実施し、移住者の視点による地域の魅力の可視化と参加者相互の交流を促進することができました。また、インターネットを活用して、市民同士でコミュニケーションをとるための仕組みづくりについて学ぶため、総務省の地域情報化アドバイザーを講師として迎

え、講演会を開催しました。
② 地域ポータルサイトを活用した情報交流の促進

移住者と地域住民の情報共有を促進するため、「木更C○N（きさこん）」内に公民館を利用するサークルや団体などを紹介するブログポータル「木更津フレッシュライフ」(<http://www.kisaccon.jp/freshlife/>)を構築し、地域住民自らが情報を発信することができるよう環境を整備しました。また、ブログポータル閲覧用の卓上型デジタルサイネージ4台を公民館に設置しました。従来から流通している紙媒体とのメディアミックスによって、地域情報を得るための手段や機会の拡大を図ることができました。

また、地域の情報発信を促進するため、NPO法人と教育機関、公民館利用サークルと連携したICT講習会を開催し、地域情報化人材の育成に取り組みました。講習会では、高齢者を中心とした参加者を大学生がサポートすることで、世代間の交流を図ることができました。

③ 公民館を拠点とした体験型交流事業

各公民館地区をフィールドとして、各地域に残る豊

かな自然や歴史などの地域の特色を活用した体験事業や講習会を開催し、移住者が地域の情報や魅力を知り、地域コミュニティに参加するためのきっかけづくりを進め、新旧住民の交流促進に取り組みました。

パッションフルーツを利用したグリーンカーテンづくり、地元漁師に伝わる伝統料理づくりの体験会や、新たな観光資源として注目されているブルーベリーを使ったお菓子づくり体験会などを開催したことで、移住者だけでなく新旧住民を含めた地域内・地域間の交流が促進されました。

今後の展望

木更津市は東京湾アクアラインによる首都圏への近接性といった地理的優位性や新たな大型集客施設の出店計画、高速バスターミナル整備などの都市機能に加え、海や里山などの豊かな自然が残り、四季折々の風情や味覚を楽しむことができます。

今後多くの方々に理想の地として木更津に住んでいただけるように、今回の取り組みを継続的に推進するための仕組みとして、NPO法人との協働などによる事業推進やこれまで実施してきた定住化に向けた事業と連動して、木更津の魅力を発信していきたいと考えています。

都市住民向け「菜園付き宅地」販売に奮闘

信頼関係築き、移住を促進

東京に近い田舎

栃木県の中央西部に位置し、北は日光市、東は宇都宮市に隣接する鹿沼市は、市域の約70パーセントが森林に覆われ、山々を源流とした清流を持つ自然豊かな都市である。かつては日光西街道・例幣使街道の宿場で商品流通の中心地として栄え、その後、日光東照宮の造営を契機に木工業が発達し、日光線の開通や関東大震災の復興等により木工業の需要

が拡大するとともに「木工のまち」として名を馳せた。現在は、イチゴやニラ、トマトなどの農業や園芸も盛んに行われ、農林商工のバランスの良いまちといえる。

また鹿沼市は、東京から100キロ圏に位置し、東北縦貫自動車道あるいは東武日光線とJR日光線を利用して、いずれも東京まで約90分と都心からのアクセスに優れている。この地理的優位性を生かし、鹿沼市では「東京に近い田舎」として田舎暮らしや野菜作りを楽しみたい人に対し、積極的に移住施策も行ってきた。

その中で、市が造成・販売した菜園付き住宅地において、移住者と地域住民の相互理解の促進や交流を行うことを目的として活動しているのが「かぬま暮らしネットワーク（愛称：くらゐね）」（以下「くらゐね」という。）である。今回は会長である大塚信男氏と事務局の山崎尚良氏

のお話を交えながら、「くらゐね」の活動について紹介したい。

進む過疎化、地域コミュニティの維持に危機感

「くらゐね」が活動する鹿沼市加蘇地区は、中山間地域にあり、近年では過疎化が進み、若者の減少により高齢化が進行している。耕作放棄地も拡大し、空き家も増えていったという。平成17年ごろから地域コミュニティの維持に危機感を抱いた住民は、市長との懇談会において、どうにか過疎化の進行を食い止めたかと訴えた。

これを受けて、鹿沼市では、前述した菜園付き住宅地（総面積1・5ヘクタール、19区画）を造成・分譲し、都市部から移住者を募った。一方で住民も、この住宅地が属する加蘇地区の加園自治会を中心に、移住者の受け入れ方法や今後の自治会の運

営等について協議し、地域住民を中心とする移住者受け入れ組織（応援組織）を平成22年7月に発足させた。この組織が「くらゐね」である。「くらゐね」はこの地域の言葉で「大丈夫、心配いらない」などを意味する。移住者確保に奮闘、菜園付き宅地完売

「くらゐね」では、新規居住者の受け入れを進めようと、菜園付き住宅地の売却に向けた広報活動として、出張PRイベントへの参加（ふるさと回帰フェア、とちぎ暮らしフェアなど）、PRチラシの作成や雑誌・情報誌・新聞等への広告掲載などに積極的に取り組んだ。また、住宅地の購入希望者に対する現地見学ツアーや体験型の交流会など、家族で楽しめるようなイベントを実施したほか、イベントの内容や地域での出来事をまとめた「くらゐね通信」を定期的に発行し、情報提供を行った。

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成22年7月

設立・運営主体＝自主的組織

代表者＝大塚 信男（会長）

会員数＝31人

〈連絡先〉事務局

〒322-8601

栃木県鹿沼市今宮町1688-1

鹿沼市 経済部 農政課内

電話：0289(63)2193



大塚会長



菜園付き住宅地の様子



住宅地での交流会（花植え交流会）

土地の購入前に、現地の下見にとどまらず、実際に地域の人たちと触れ合えたことは、移住希望者にとって大きな安心材料となったに違いない。しかも地域の人たちが、土地の購入を検討している自分たちのために、そば打ち体験や草刈り講習、地域の学校や公園等を巡る見学ツアー、野菜栽培講習などを企画し、細やかな情報提供も行ってくれている。自分たちは「この地域に受け入れられている」、「移住してもこの地域でやっていける」との自信に繋がった人も少なくないだろう。

こうした「くらくね」のホスピタリティ溢れる活動の甲斐あって、販売開始から1年8カ月で19区画すべての住宅地が完売した。しかも、移住者は30代から40代の夫婦とその子供という世帯が約半数あり、地域の若返りが図られ、地域に新たな活力が生まれた。

移住者と地元相互理解のために

移住者と交流を行う際、「くらくね」の地元住民が気を付けていることがある。それは「この地域のやり方はこうだ、などと押し付けたりし

ないようにすること」と大塚会長は語る。相手の意見を十分聞くように心が掛けることが、ともに地域を担う移住者と地元住民の良好な関係の形成に繋がっている。

一方で、移住者の姿勢にも注目すべき点がある。鹿沼市に引っ越してきた移住者は、自分たちの家族構成や年齢、職業、以前の住所、趣味などの個人情報を自己紹介チラシにして、地元住民の家にすずんで配布しているというのだ。「移住者自らに、ひととなりオープンにしてみようことは、地域住民の安心にも繋がります、移住者と地域住民との距離が縮まる良い取り組みだ」と事務局の山崎さん。

「くらくね」の活動を通して移住者と地域住民との間に信頼関係が生まれ、互いに心を開くことで、双方の安心な暮らしに繋がっている。移住者も今ではすっかり地域になじみ、新たな自治会の班が一つできるほど地域活動にも積極的に参加しているという。

地域活性化に向け
波及効果も

鹿沼市が整備した菜園付き住宅地は、平成24年度に

全19区画が完売したが、現在でも「くらくね」の活動として、住宅地にある公共用地の草刈り作業等が行われ、「くらくね通信」も年間を通して定期的に発行されている。草刈り作業については、地元住民が面倒がらず、移住者と協力して取り組んでいる。また、移住者も「くらくね」の組織に入り、地元住民との交流はより一層深まっている。

さらには、地域見学などの活動を通して、地元住民が自分たちの地域について改めて見つめ直したところ、地域の隠れた資源に気づき、空き家（古民家）の活用を目指した活動を行う組織が立ち上がるなど、地域の活性化に向けた波及効果もあった。

「くらくね」の活動を行ってきて一番うれしかったことは、「地域に若者が増え、外を歩いていると気さくに声をかけてくれる」ことだと語る大塚会長の表情は、これまでの活動の達成感で満ちていた。移住してきた側、受け入れた側、その両者が笑顔になれるような素敵なまちづくりに活動に、鹿沼市で出会うことができた。

編集委員 ● 野村真弓

書籍紹介

『地域を元気にする 実践！コミュニティデザイン』



林 まゆみ 編

(延藤安弘、木下 勇、小林郁雄、佐藤亮子、ジェフ・ホー、田中 充、チャン・シェンリン、豊田玲子、中瀬 勲、林まゆみ、林 泰義 共著)

彰国社 (2013年10月10日発行)

定価：2,500円＋税

本書は、地域の活性化のために取り組んでいる11人のそれぞれの現地での活動記録が綴られたものである。この11人の筆者は、2010年開催の環太平洋コミュニティデザイン国際会議の開催実行委員会のメンバーであり、本書には日本国内のみならず国外の地域づくりの事例も紹介されている。

第1章では、中瀬勲氏ら4人の筆者がそれぞれ丹波地域、丹後半島、安坑三城（台湾）、及び四国地方における自然や農村文化など地域資源を活用したまちの魅力づくりを紹介している。第2章ではジェフ・ホー氏ら3人が空間づくりと人づくりに焦点をあて、シアトル（アメリカ）の都市型コミュニティガーデンやヨーロッパの人々が集う公共の空間、淡路島で育まれてきた「スローライフ」・「スローフード」の暮らしをそれぞれ取り上げている。そして最後の第3章では、田中充氏ら4人により「みんなで共有する仕組みづくり」と題して、阪神・淡路大震災の被災地となった神戸、東日本大震災の被災地となった陸前高田市のコミュニティ再生、名古屋市の“物語りアプローチ”によるコミュニティデザインについての事例が綴られている。

これらの事例からは、元気で魅力的なまちづくりのために、目標に向かっていくプロセスをまちの人々が共有することの大切さがよく伝わってくる。コミュニティデザインを行っていくうえでのヒントが得られる1冊である。

『地域再生～人口減少時代の地域まちづくり～』



鈴木 浩、山口幹幸、川崎直宏、中川智之 編著

日本評論社 (2013年8月25日発行)

定価：3,200円＋税

今日、「まちづくり」という言葉は人々の間に定着し、多くの自治体で町おこしや村おこしといった地域再生に向けた取り組みがなされている。こうした取り組みを機に地方への関心が高まっているのも事実である。しかし、現在行われている地域再生へ向けた取り組みにはまちづくりの理念や地域のビジョンが欠如したまま進められ、地域の立て直しに結びついていないとは必ずしも言えないものもある。

地域を取り巻く課題はさらに複雑化し、単に地方だけの問題ではなく、大都市を含めた日本社会全体に共通する課題となりつつある。そしていずれの地域においてもこれらの課題への対応は避けて通れない状況にあるが、課題に果敢に取り組む人々がいて、地域再生へ向けた兆しが見られる地域もある。本書ではこうした各地で展開される実践的活動事例から特色ある複数の事例を取り上げ、地域再生の根源に迫ることで地域再生やまちづくりの理念や方向性を提言している。

これからの日本は、人口減少社会という先進国がかつて経験したことのない、いわば手本のない時代を迎える。地域の課題解決のためにはこれまでの国任せの仕組みから、地域の課題を克服する能力を備えた自立した地域が国を支える仕組みに転換していくことが求められている。本書は地域再生に様々な立場で関係する人々に地域課題解決のためのヒントを提供してくれる1冊である。



御殿場市長 ● 若林洋平

人口が増え続けるまち 御殿場を目指して

御殿場市は、静岡県東部の東北部に位置し、西には昨年6月に世界文化遺産となった富士山を望み、東は箱根外輪山に囲まれた人口9万人の高原都市です。

当市は、東名高速道路を利用すると首都圏から約1時間の距離にあるという交通アクセスの良さに加え、豊かで美しい自然環境に恵まれており、その豊富な地下水や新鮮な空気を求め、自動車関連産業や食品産業など多くの企業が進出しています。また、世界の宝「富士山」を有していることにとどまらず、国内有数の観光地である伊豆、箱根、富士五湖を結ぶ三角点の中心に位置することから、観光都市としても発展し、「富士山」だけではなく「御殿場プレミアムアウトレット」などの人気の観光施設もあります。そのような魅力あふれる御殿場市には年間約1300万人余のお客様が訪れてくださいます。

さらに、富士の裾野には陸上自衛隊の本州最大の演習場である東富士演習場があり、市内には自衛隊の三つの駐屯地や米軍キャンプがあるという一面ももっています。さて、当市では、恵まれた自然環境・立地条件を活かして、将来、「人口が増え続ける」まちづくりを目指しており、そのための重要施策として、「経済活性化」「地域医療体制及び子育て支援の充実」「危機管理体制の強化」を掲げ、官民一体となって各種事業に取り組んでいます。

経済活性化については、御殿場を起点として各地へ観光していただくように「観光ハブ都市」を目標とし、アウトレットの他にも「時の栖リゾート」「富士山樹空の森」「秩父宮記念公園」「東山旧岸邸」などの魅力的な観光施設、ご当地グルメである「みくりやそば」、そして「御殿場コシヒカリ」「わさび」「水かけ菜」などの特産品や、ウイスキーやハムなどの地場産品を強力でPRしています。また、「職の創出」「雇用の確保」のため、企業誘致にも全力で取り組んできた結果、順調に工場立地などが進んでおりますが、さらに誘致に力を入れていきます。地域医療体制・子育て支援の充実については、市民の皆様が健康で安全・安心な生活を築くために、市内医療施設に対し支援を行うとともに、少子化が進むなかで、子ども医療費助成などといった「必要とされている支援」の充実に力を入れて取り組み、一段と子育てしやすい環境

境づくりのための支援をしています。

危機管理体制の強化については、想定される富士山噴火や東南海地震に対応するため、情報体制の確立、自主防災組織の強化と同時に、広域避難計画の具体化といった「大災害への備え」を、スピード感を持って進めています。

そのような中、昨年は当市にとっても大きなニュースが二つ届きました。一つは「富士山の世界文化遺産登録」であり、もう一つは「2020年の東京五輪開催決定」です。

富士山が世界文化遺産に登録されたことにより、経済の活性化を期待するところではありますが、一方で、富士山の環境や美しさを保全し後世に伝承していく責務が課せられたと認識しています。世界の宝「富士山」の景観を美しくすることは地元自治体の責任でありますので、当市では本年4月から景観条例を施行します。「御殿場から見る富士山が一番美しい」ことを、一人でも多くのお客様に知っていただくことが私の切なる願いであります。

2020年夏季五輪の開催都市が東京に決定されたことも当市にとって大きな喜びです。オリンピックに訪れたお客様の多くが「富士山」にもお見えになることが予想されます。また、新東名の御殿場ジャンクション以東の整備、さらには中央高速道路と新・旧東名高速道路を結ぶ国道138号バイパスの整備が従来の予測より早く進み、供用開始が前倒しされることから、当市の経済にも大きな追い風となります。特に、市内にある馬術センターがナショナルトレーニングセンターに指定されており、競技場につきましても、積極的に誘致を推進してまいります。

以上のようなことから、当市にとりまして、2020年までに「きっちりとした体制づくり」を確立することは、人口が増え続けるまちづくり・地域づくりを実現するために極めて重要であると考えています。

このため、今後も市民の皆様と一緒に、「笑顔と活力あふれる御殿場」の実現のために全力で取り組んでまいります。

絵になるねえ 群馬



GUNMA

Discover Exciting Experiences

WELCOME TO THE BEAUTIFUL COUNTRY

Mt. Shibutsu, Skunk Cabbage/Oze National Park,
Autumn Leaves/Mt. Arafune, Mt. Asama, White World Oze Iwakura,
Mt. Haruna Ropeway, Rafting/Minakami Town, Serada Shrine/Ota City,
Konaka Falls/Midori City, Watarase Keikoku Railway, Takaragawa Spa,
Iris/Isesaki City, Sanbaseki Gorge/Fujioka City, Apple farm/Numata City,
Pear farm/Takasaki City, Daruma, Cosmos, Haniwa, Grapes.
Please enjoy your time in Gunma.



群馬県

群馬県

都道府県漫遊
POSTER GALLERY

地域づくり

2014・2月号 46

竹田市は、大分県の南西部に位置し、西は熊本県阿蘇市、南は宮崎県高千穂町に接しています。農業は米を中心に、大分県の特産品でもあるカボスや椎茸、トマトやスイートコーンといった高原野菜、サフランをはじめとする花き、肉用の久住高原牛などを生産しています。

江戸時代後期には南画家の田能村竹田、明治時代には名曲「荒城の月」を作曲した瀧廉太郎などを輩出しています。観光では、岡城址、武家屋敷、瀧廉太郎記念館などの史跡や文化財、絶え間なくこんこんと湧き出る竹田湧水群や白水の滝などの名水、時の藩主をもとりこにした日本一の炭酸泉・長湯温泉、九州本土最高峰のくじゅう連山を望む雄大な久住高原が訪れた人たちを魅了しています。

竹田市では全国に先駆けて「農村回帰宣言」を標榜し、全国に竹田市への移住を促すさまざまな政策を展開しています。また、豊かな温泉を健康づくりに取り入れるために、宿泊や立ち寄り入浴などに市が独自に補助をする「温泉療養保健システム」に取り組んでいます。このシステムを利用して、竹田市の温泉や自然、文化をトータルに楽しんで元気になる「竹田式湯治」を満喫してください。



■岡城址 名曲「荒城の月」のモチーフになったといわれる難攻不落の名城



■カボス 竹田市では夏から冬にかけて食卓に欠かせない



■久住高原 雄大な久住高原には日本一のマラソン練習コースがある



■竹楽 2万本の竹灯籠が幽玄の世界へと誘う竹田市最大のイベント。毎年、11月第3週の金・土・日に開催される



■姫だるま 家庭円満や厄よけのご利益があるといわれる竹田市の特産品



■竹田湧水群の一つ「河宇田湧水」竹田湧水群は県外からも水汲みに訪れる人が多い



■白水ダム 日本一美しいと称賛されるダム



■ラムネ温泉 日本で指折りの高濃度炭酸泉を湧出する温泉

平成25年度 地域再生実践フォーラムの開催のお知らせ

新たな視点や手法の導入による地域の再生、持続可能な地域づくりを目指し、地域活性化に向けた実践的エッセンスを広く提言・発信します。

日時：平成26年3月5日（水） 14：10～17：15

会場：東京国際フォーラム（東京都千代田区丸の内3丁目5-1）

対象：地域再生に関心のある方 400名（参加無料）

プログラム：

○基調講演 14：10～15：10

テーマ：「里山資本主義」

講演者：藻谷 浩介 氏（株式会社日本総合研究所調査部 主席研究員）

○分科会 15：25～17：15

分科会1（観光）

テーマ：「選ばれ続ける地域とは」

コーディネーター：山田 桂一郎 氏（JTIC.SWISS 代表）

パネリスト：沢登 次彦 氏（株式会社リクルートライフスタイルじゃらんリサーチセンター センター長）

藻谷 浩介 氏（株式会社日本総合研究所調査部 主席研究員）

高砂 樹史 氏（株式会社小値賀観光まちづくり公社 専務取締役）

分科会2（景観）

テーマ：「水のある風景に学ぶ「景観まちづくり」」

コーディネーター：後藤 春彦 氏（早稲田大学創造理工学部 学部長・教授）

パネリスト：杉浦 榮 氏（S2 Design and Planning 代表）

鈴木 洋 氏（山形県金山町長）

内藤 廣 氏（建築家・東京大学 名誉教授）

●参加申込 地域活性化センターのホームページ<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>より様式をダウンロードし、必要事項をご記入のうえお申込みください。（左のページの申込書もご活用ください）

通信センター



藻谷 浩介 氏

平成26年度 地域再生実践塾開催のお知らせ

第1回 東京都八王子市 平成26年7月3日（木）～4日（金）

開催分野：地域経営（地域コミュニティの再生）

主任講師：炭谷 晃男氏（大妻女子大学社会情報学部 教授）

第2回 高知県高岡郡四万十町 平成26年7月23日（水）～25日（金）

開催分野：地域ブランド（6次産業化による地域振興）

主任講師：畦地 履正氏（株式会社四万十ドラマ 代表取締役社長）

第3回 埼玉県川越市 平成26年8月27日（水）～29日（金）

開催分野：中心市街地活性化（まち並み形成と中心市街地の活性化）

主任講師：新津 重幸氏（高千穂大学大学院 教授）

第4回 佐賀県佐賀市 平成26年9月25日（木）～27日（土）

開催分野：地域資源（地域資源の展開）

主任講師：飯盛 義徳氏（慶應義塾大学総合政策学部 准教授）

第5回 福島県南会津郡下郷町大字大内（大内宿） 平成26年10月15日（水）～17日（金）

開催分野：景観（街並み保全と地域づくり）

主任講師：相澤 韶男氏（ゆいでく有限会社 代表取締役）

第6回 静岡県熱海市 平成26年11月19日（水）～21日（金）

開催分野：観光（観光マーケティング）

主任講師：沢登 次彦氏（株式会社リクルートライフスタイルじゃらんリサーチセンター センター長）

平成 25 年度 地域再生実践フォーラム 参加申込書

分科会は、下記のどちらかお選びください。

分科会① 『選ばれ続ける地域とは』

分科会② 『水のある風景に学ぶ「景観まちづくり」』

申込締切日 平成 26 年 2 月 14 日（金）

定員（400 名）になり次第、申し込みを締め切らせていただきます。

勤務先・団体・学校名等	
（該当するものに○印を）	行政・民間企業・NPO 法人・任意団体・商工団体・大学・その他（ ）
郵便番号・住所	〒 -
TEL	
FAX	
E-Mail	

参 加 申 込 者			
氏 名	所属・役職名	年 齢	分科会の希望（○印を）
		代	分科会①・分科会②・どちらでも可
		代	分科会①・分科会②・どちらでも可
		代	分科会①・分科会②・どちらでも可
		代	分科会①・分科会②・どちらでも可
		代	分科会①・分科会②・どちらでも可

※ご記入いただいた個人情報については、当センターからの事務連絡のほか、各種事業へのご案内等に利用させていただく場合がございます。

お問い合わせ先

一般財団法人 地域活性化センター 地域支援課

〒103-0027 東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階

TEL (03)5202-6137 FAX (03)5202-0755 E-mail chiiki@jcrd.jp

地域づくり2月号

2014年 2 月 1 日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131（代） <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課（03-5202-6138）まで、ご連絡下さい。



豊かな街づくりに 役立つ宝くじ。

宝くじの収益金は、図書館や
動物園、学校や公園の整備を
はじめ、少子高齢化対策や
災害に強い街づくりまで、
いろいろなかたちで、みなさまの
暮らしに役立てられています。



財団法人 日本宝くじ協会

財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や公益法人等が行う社会に貢献する
事業への助成を行っています。

日本宝くじ協会ホームページ <http://jla-takarakuji.or.jp/>

